

2020年度 慶應義塾大学体育研究所 活動報告書

特集：コロナ禍における体育・スポーツの取り組み



目 次

「巻 頭 言」 所長 石手 靖	1
I. 特集 コロナ禍における体育・スポーツの取り組み	3
II. 研究活動記録（研究委員会）	
1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成	8
2. 所内定例研究会発表要旨	23
3. 浅野基金・所内研究・基盤研究・学事振興基金・小泉基金報告書	29
III. 教育活動記録	
III-1. 授業の実施（教育委員会）	
1. 2020年度体育科目の履修者統計	40
2. 授業評価の実施	44
3. 通信教育対象科目	50
4. 塾内における授業担当	50
III-2. スポーツイベントの開催（スポーツ振興委員会）	
1. 塾内競技大会	51
2. 公開講座	51
3. 所内施設の開放	51
III-3. 他機関との連携	
1. 一貫校連携	52
2. 体育会支援	52
IV. 業務活動記録（千葉 徹 主事）	54
Appendix. 東京2020大会に向けた取り組み	
『KEIO 2020 project 2020年度活動報告』	56

巻 頭 言

慶應義塾大学体育研究所
所 長 石 手 靖

日吉キャンパスが位置する神奈川県では2021年を迎えて間もなく、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け2度目の緊急事態宣言が発出されました。この感染症が全世界を揺るがして一年余りが過ぎましたが、未だに収束する兆しの見えない状況です。まずは、このたびの感染症に罹患された方々、そのご家族、感染拡大により日常生活に影響を受けているすべての皆様に心よりお見舞い申し上げます。

さて、ここに2020年度慶應義塾大学体育研究所活動報告書を発行することとなりました。今年度はまさに感染症に翻弄された一年間でしたが、体育研究所における研究、教育、スポーツ振興の各活動は、所員はじめ多くの関係者の皆様方のご尽力により進められここに記録することが叶いました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本書の特集において詳しく記載しますが、この度のコロナ禍において慶應義塾大学の授業は過去に経験のない影響を受け、体育研究所設置科目もその例外ではなく、特に体育実技科目は感染拡大の可能性の高い授業として多くの問題が浮き彫りとなりました。その結果、春学期は休講を余儀なくされましたが、秋学期においてはオンキャンパス（対面）で開講することができました。このことによって、オンライン授業のみ続く塾生にとって、体育実技科目が運動の機会や塾生間の交流の場として大きく期待されていることが確認でき、体育教育の意義と目的を再認識することとなりました。

日吉キャンパスのすべてがオンライン授業となった春学期に小職も体育学講義を一コマ担当し、その初回で人生初のオンライン授業を経験しました。履修者が出席状態となり「顔も声も無しでよし」と指示し、チャットでの連絡機能をチェックするため「短い単語か文字を送ってください」と言うところから「あ」の一文字でした。教員の不慣れから何ともあっさりとした盛り上がりのない授業をまとめ、「これで授業を終了します」と告げると、「ポンポン」という音だけが鳴り続け直ちに全員が退室しました。「こんにちは」「さようなら」と直接声を交わしたいと痛感しました。

体育研究所では、所員が共通に掲げている目的の一つとして、「行動力に溢れた塾生を育てる」ということを謳っています。我々が目指す行動力とは何か。それをどうやって育てるか。これからの時代に向けさらなる構築が求められていることを実感しています。

以 上

I. 特集：コロナ禍における体育・スポーツの 取り組み

コロナ禍における体育・スポーツの取り組み

昨年度末から新型コロナウイルス感染症が拡大し、1年が経過した2020年度末現在においても未だ収束の見通しが立っていない状況にある。その影響により様々な生活の制限や変化が強いられてきた中、本研究所においては新常態の生活様式を前提とした体育・スポーツの取り組みが実践されてきた。本特集では春学期の体育実技休講、うちでも身体を動かそうプロジェクト、秋学期における体育実技開講に向けた準備、感染症対策を講じながらの対面形式授業の実施というコロナ禍における一連の取り組みを振り返る。

1. 春学期における体育実技休講

2020年4月7日に政府より緊急事態宣言が発出され、義塾においては大学キャンパスが閉鎖された。学事日程が変更になり、入学式などの大規模イベントは中止され、体育会やサークルなどの課外活動も活動自粛を求められた。義塾はこの状況を踏まえて春学期の授業を一律オンラインによって行うことを決定した。本研究所の体育学講義もすべてオンライン形式で実施されることになった。体育実技についてもオンラインでの開講が検討されたものの、運動実施場所の確保や安全面、授業開始に必要な通信環境の整備、授業の質保証などの観点から多くの懸念点が取り上げられ、やむなく休講が決定された。しかしながら、活動自粛や授業のオンライン化によって塾生の運動の機会が減少することを危惧し、室内で取り組める簡単な運動プログラムや心身の健康に関する情報発信を行なっていくことにした。

2. うちでも身体を動かそうプロジェクト

コロナ禍の外出自粛や授業WEB化などによって、運動の機会や時間が減ることを想定

し、教育委員会とスポーツ振興委員会が中心となり、塾生・教職員向けに「うちでも身体を動かそうプロジェクト」と題した運動や健康に関する情報を発信する試みを実施した。主に、簡単に個人が部屋でやれる運動・テスト・ストレッチなどを動画で紹介した。体育研究所教員自らが出演し、塾生・教職員の方々の動機を喚起する狙いもあった。オンライン授業の合間にWEB会議の後にデスクワークの息抜きに試してもらえたのではと考えている。尚、合計再生回数は883回になった。(アクセス日：2021年2月24日)。

【以下、動画タイトル一覧】

- うちでYoga (奥山君：ボディコンディショニング ヨガ&エアロビクス・ボディコンディショニング ヨガ (三田) 担当)
- うちでYoga II (奥山君：ボディコンディショニング ヨガ&エアロビクス・ボディコンディショニング ヨガ (三田) 担当)
- うちでYoga III (奥山君：ボディコンディショニング ヨガ&エアロビクス・ボディコンディショニング ヨガ (三田) 担当)
- うちでYoga IV (奥山君：ボディコンディショニング ヨガ&エアロビクス・ボディコンディショニング ヨガ (三田) 担当)
- 【チャレンジ企画】ペーパーキャッチチャレンジ (永田君・福士君・東原君・寺岡君)
- イメージと動作の協調を楽しむ学習体験 (山内君：フィットネストレーニング・ハンドボール担当)
- イメージと動作の協調を楽しむ学習体験 II (山内君：フィットネストレーニング・

ハンドボール担当)

- 簡単！バランスチェックテスト（板垣君：ピラティス担当）
- 先ず獣身を成す（坂井君：テニス担当）
- コーディネーション能力を養う！（福土君：フットサル担当）
- 1分リラクゼーション①うで編（稲見君：フィットネストレーニング担当）
- 1分リラクゼーション②くび編（稲見君：フィットネストレーニング担当）
- 1分リラクゼーション③けんこうこつ編 其の一（稲見君：フィットネストレーニング担当）
- 1分リラクゼーション④けんこうこつ編 其の二（稲見君：フィットネストレーニング担当）
- 1分リラクゼーション⑤タイピング疲れ編（稲見君：フィットネストレーニング担当）
- “脱”座りすぎのススメ（東原君：ソフトボール担当）

3. 秋学期における体育実技開講に向けた準備

2020年8月3日に日吉学生部より秋学期は感染防止に可能な限りの配慮を行なったうえで、一部の授業を対面で実施することを可能にすると通知された。想定される授業形態は対面授業、オンライン（オンデマンド方式）授業、オンライン（リアルタイム方式）授業の3区分とされた。体育実技においては、科目の特性によって授業形態が異なること想定し、教育委員会主催でオンライン対応のための講習会が体育実技担当者向けに実施された。講習会は全4回で構成し、8月19日、21日、24日、26日にオンラインで実施された。内容は、オンライン授業で利便性が高いアプリケーションについて、その基本的な利用方法を提示することとした。例えば、履修者への連絡や教材を配布する「授業支援」の利用方法、Zoom や Power Point を使ったオンデ

マンド授業資料の作り方、Box を用いた授業素材の配信方法、オンラインリアルタイム方式を想定した Zoom の操作方法を扱った。

9月からは対面授業実施のためのガイドラインの整備と感染予防対策の計画を進めた。ガイドラインの作成にあたり、まず、義塾の感染症対策本部と保健管理センターが作成したガイドラインに沿って、大学入構時の体温確認とマスクの着用を徹底させ、教員と履修者の健康管理を求めることとした。実技授業担当教員に対しては、「体育研究所設置科目実技種目 対面授業実施における共通ガイドライン」を作成し、健康管理要請、授業前から終了後における感染予防対策、体調不良者への対応等を共有した。また、様々な理由により対面形式の授業へ参加できない、参加を控える履修者への対応についても対応を要請した。さらに履修学生に対しては「体育研究所設置科目体育実技・演習秋学期履修ガイドライン」を作成し、健康管理の要請に加え、履修時の注意点として、更衣室の利用についてガイドラインを示した。更衣室利用中は必ずマスクを着用し、室内での会話は禁止とすること、15分以内に更衣を済ませること、シャワーの利用は禁止とすることなどを定め、周知を徹底するために各体育実技実施場所の更衣室にポスターで掲示した（図1）。授業中の感染予防対策としては、手洗い・手指の消毒、用具の消毒、身体的距離の確保、換気を徹底するように注意喚起を行なった。また、各実技科目特有の感染対策については、関連する競技団体および協会が示しているガイドラインを参照し、各教員が責任を持って取り組んだ（図2）。

実際の授業形態は、多くの科目が全ての回を対面授業で行なったが、室内で実施する科目については履修者を2つのグループに分散させ、授業の前後でグループを入れ替えて実施する授業形態、または、オンデマンド教材を併用し隔週で対面授業を実施する形態を

とった授業もあった。このような分散型授業形態は、実技実施場所のサイズを考慮し密集を回避するために必要な対策であったが、履修生にとっては体育実技に参加した時間が例

年に比べ半減する結果となった。この状況を踏まえ、来年度は予め定員を縮小し、全ての回で対面形式の授業が実施できるような方法を検討することになった。

体育実技履修者の皆様へ 記念館更衣室の利用について

更衣室を利用するにあたって、以下のことを厳守してください。

- ✓ 体育実技履修者の更衣室利用時間は、**8:30～15:00**まで、とします。(水曜4限の履修者のみ**16:45**まで利用可とします。)
- ✓ 上記時間中は、履修者以外の利用はお控えください。
- ✓ 入室時には、手指消毒をしてください。
- ✓ 更衣室利用中は、**マスクの着用を必須**とし、**会話を禁止**とします。
- ✓ 更衣は、**15分以内**に済ませて、退室してください。
- ✓ 荷物は、更衣室に置いたまませず、実技場所へ持参してください。
- ✓ 貴重品は、各自で管理してください。(ダイヤル式ロッカーも、合わせてご利用ください。)
- ✓ 更衣室の滞在時間短縮およびマスク着用の必須化のため、**シャワーの利用は禁止**とします。

更衣室の利用についてご不明な点は、授業担当教員へご確認ください。履修者の皆様には、ご不便をおかけするかとありますが、昨今の情勢をご理解いただき、ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

慶應義塾大学体育研究所

図1. 更衣室利用についてのポスター



図2. 感染防止対策を講じた体育実技

4. 秋学期の授業を終えて

教員と履修生の協力のおかげで秋学期は感染症クラスター発生などの大きな問題もなく終えることができた。ご協力に心から感謝申し上げます。体育実技履修学生を対象とし、体育実技履修実態調査を実施した（添付資料：2020年度秋学期 慶應義塾大学体育実技履修実態調査 集計結果報告）。その結果、履修者による体育科目授業への満足度は高く、特に、体育実技のみがオンキャンパスでの授業だったと答えた塾生が実技履修者の3割以上を示し、それらの塾生には体育実技を履修することによりキャンパスへの登校機会を得、仲間と交流する有意義な時間を提供できたと言える。さらには、運動不足の解消等の身体的な影響のみならず、新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン中心となった環境下における孤立感の解消にも貢献できたと考えられる。また、教員による感染症予防対策に関して十分にされていたと回答した履修者は全体の9割以上であり、上述した体育実技開講に向けた準備に対して成果を示すものであった。一方で、更衣室の利用方法について不安を感じていた履修生もいた。この点は来年度以降、引き続き対面授業を実施していくために重点的に取り組むべき課題であると考えられる。

5. まとめ

コロナ禍における新しい生活様式においては、対人を前提としていたこれまでの体育・スポーツのあり方を考え直さなければならない事態となった。うちでも身体を動かそうプロジェクトに代表されるようなオンラインによる健康促進にチャレンジしてきた一方で、体育実技においては対面授業の教育的意義を改めて見直す契機になった。2021年1月8日には2度目の緊急事態宣言が発出され、未だ収束の目処は立っていない。コロナ禍における制限はこれからも当分の間続くことが想定

されるが、体育・スポーツの取り組みを絶やすことのないよう模索していく必要がある。

（文責）教育委員会，スポーツ振興委員会

Ⅱ. 研究活動記録

(研究委員会)

1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成

石手 靖 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・稲見崇孝, 福士徳文, 東原綾子, 永田直也, 坂井利彰, 須田芳正, 村松憲, 村山光義, 石手靖, 小山亜希子, 中川一紀, “英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア『KEIO 2020 project』の取り組み”, SFC Journal, 20:162-182, 2020.
- ・鳥海崇, 森文彦, 坂井利彰, 加藤幸司, 吉田泰将, 須田芳正, 石手靖, “大学運動部員を対象としたマウスガードの認知および利用の実態調査”, スポーツ歯学, 24 (1):38-43, 2020.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本バレーボール学会理事長
- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事
- ・横浜ビーチバレーボール連盟理事

研究助成等

- ・“東京2020オリンピック・パラリンピック英国サポート【KEIO 2020 project】を通じた KEIO スポーツレガシーの共創(研究代表者)”, 2020年度未来先導基金, 単年度助成金額2,876,000円。(※新型コロナウイルス感染症の影響により2021年度に繰越)
- ・“大学生および中高生のスポーツ現場におけるマウスガードの認知および利用の実態調査(共同研究者:研究代表者 鳥海崇)”, 2020年度学事振興資金(共同研究), 1,000千円.
- ・“スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフスキルの特徴—縦断的調査・第三報—(共同研究者:研究代表者 村松憲)”, 体育研究所所内研究費, 807,016円.

佐々木玲子 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

- ・佐々木玲子, “JSPO-ACP アクティブチャイルドプログラム ガイドブック”, 第2章, p.21-38, 公益財団法人日本スポーツ協会, 2020.

(論文)

- ・菅野範, 安藤智教, 中禮宏, 松本勝, 鈴木宏哉, 佐々木玲子, 山下光輝, 佐藤勲興, 海老原京太, 大島直也, 林海里, 高橋優美, 外川海斗, 吉田結梨子, 入江浩一郎, 北邦宏, 丸山裕士, 石塚創也, 青野博, 上野俊明 “ガム咀嚼トレーニング介入が中学生の咬合力と運動能力に及ぼす影響”, スポーツ歯学, 24-1, 12-17, 2020
- ・福士徳文, 村山光義, 佐々木玲子, 野口和行, 加藤幸司, 永田直也, 稲見崇孝, 東原綾子, 寺岡英晋, “生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 60 (1):19-27, 2021.
- ・石沢順子, 大貫麻美, 椎橋げんき, 佐々木玲子, “幼児・児童期の健康教育において育成を目指すコンピテンスに関する研究:海外の教育課程を踏まえた一考察”, 白百合女子大学, 保育・教育の実践と研究:初等教育学科紀要, 6, 2021. (印刷中)
- ・石沢順子, 大貫麻美, 椎橋げんき, 稲田結美, 渡邊淳, 佐々木玲子, 奈良典子, 原口るみ, 鍛冶礼子, “2020年度健康教育におけるコンピテンスの検討に関する全体協議会(オンライン)実施報告”, 白百合女子大学, 保育・教育の実践と研究:初等教育学科紀要, 6, 2021. (印刷中)

(執筆協力)

- ・“カラダを使った外遊び&おうち遊びですくすく元気に！”，ハッピーノート 夏号，vol.63，pp.66-69，ミキハウス子育て総研，2020.

学会発表等

- ・佐々木玲子，石沢順子，“東日本大震災被災地域における幼児の運送能力の現状～福島県相双地域の事例～”，第18回日本発育発達学会，宇都宮大学（オンライン），2020.5.25-6.7.
- ・石沢順子，大貫麻美，椎橋げんき，稲田結美，佐々木玲子，原口るみ，“児童が自らの健康を保持・増進できるコンピテンスを育むためのSTEAM教育の検討 体育科を中心とした教科横断型プログラム開発に向けて”，日本科学教育学会第44回年会，オンライン，2020.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・佐々木玲子，“アクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）研修会～理論編～”，公益財団法人日本体育協会令和2年度アクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）研修会，大分県大分市，2020年9月.
- ・佐々木玲子，“運動遊びが育む心とからだ”，中野区幼稚園教育研究会，東京都中野区，2020年9，10，11，12月.
- ・佐々木玲子，“幼児期の運動遊びの指導について”，学校法人鴨下学園栗島幼稚園園内研修会，東京都足立区，2020年9，12月.
- ・佐々木玲子，“相双地区幼児の運動能力について”，令和2年度福島県幼児期運動指針実践者会議，福島県南相馬市，2020年12月.

(役職)

- ・日本学術会議連携会員
- ・日本体育学会理事
- ・日本バイオメカニクス学会理事
- ・日本子ども学会理事
- ・比較舞踊学会副会長
- ・日本スポーツ協会スポーツ医・科学専門委員会委員
- ・日本スポーツ協会指導者育成委員会事業推進プロジェクト委員
- ・横浜市スポーツ推進審議会委員
- ・ふくしまっ子体力向上総合プロジェクト支援委員会委員

研究助成等

- ・“リズムミカルな動作遂行過程からみた調整力の発達特性—幼児の動きの評価と改善に向けて”，科学研究費助成金 基盤研究（C），（19K02593）.
- ・“幼少期から自らの健康を保持・増進できるコンピテンスを育むSTEAM教育の検討（研究分担者：研究代表者 石沢順子）”，科学研究費助成金 基盤研究（C）（20K03258）.
- ・“身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究（共同研究者：研究代表者 村山光義）”，学事振興資金（共同研究）.

村山 光義 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・村山光義，“アスリートに対する Photobiomodulation therapy の応用 —スポーツ・パフォーマンス向上への研究紹介—”，日本レーザー医学会誌，41（2）：133-141，2020.
- ・Murayama, M, Nosaka, K, Inami, T, Shima, N, Yoneda, T. “Biceps brachii muscle hardness assessed by a push-in meter in comparison to ultrasound strain elastography”, Scientific Reports, 10: 20308, 2020.

- ・稲見崇孝, 福士徳文, 東原綾子, 永田直也, 坂井利彰, 須田芳正, 村松憲, 村山光義, 石手靖, 小山亜希子, 中川一紀, “英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア『KEIO 2020 project』の取り組み”, SFC Journal, 20 (1): 162-182, 2020.
- ・福士徳文, 村山光義, 佐々木玲子, 野口和行, 加藤幸司, 永田直也, 稲見崇孝, 東原綾子, 寺岡英晋, “生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 60 (1): 19-27, 2021.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(シンポジウム)

- ・村山光義, 慶應義塾大学体育研究所・(公社) 全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム『コロナ禍のオンライン体育実技を振り返る～今後の遠隔実技のあり方と共に～』コーディネーター (慶應義塾大学体育研究所基盤研究3班の活動として), (Zoom Meetingにて), 2021.1.30.

研究助成等

- ・“交感神経活動が筋硬度に及ぼす影響”, 文部科学省科学研究費(基盤研究(C)) 課題番号19K11556, 100万円
- ・“身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究(研究代表者)”, 学事振興資金(共同研究), 30万円
- ・“大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る(基盤研究3班)(共同研究者: 研究代表者 村山光義)”, 体育研究所所内研究費, 75.9万円
- ・“筋機能評価に有効な Hand-Held type の硬度計開発” 新光電子株式会社との共同研究, 100万円, 2019.10-2020.9.

当年中の研究教育活動の概要

当年は、COVID-19による自粛措置の影響で筋硬度研究における実験等の推進ができなかった。一方で、緊急事態宣言や遠隔授業実施下における学生の心身の健康について研究所内で共同研究を立ち上げ、調査研究を行った。所内の基盤研究においても遠隔による体育授業の振り返りと今後を検討するため、(公社) 全国大学体育連合関東支部との共催シンポジウム『コロナ禍のオンライン体育実技を振り返る～今後の遠隔実技のあり方と共に～』をコーディネートした。

加藤 大仁 【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・日本運動・スポーツ科学学会理事
- ・埼玉県バスケットボール協会裁定委員

当年中の研究教育活動の概要

昨年に引き続き、バスケットボールの戦略・戦術について纏めるべく資料収集やインタビューを実施すると共に、翻訳・執筆作業を進めている。

村松 憲 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・稲見崇孝, 福士徳文, 東原綾子, 永田直也, 坂井利彰, 須田芳正, 村松憲, 村山光義, 石手靖, 小山亜希子, 中川一紀, “英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア『KEIO 2020 project』の取り組み”, SFC Journal, 20: 162-182, 2020.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・公益財団法人日本オリンピック委員会 強化スタッフ (情報・戦略スタッフ)
- ・公益財団法人日本テニス協会 強化情報・科学委員会委員
- ・公益財団法人日本テニス協会 コーチング委員会常任委員
- ・日本テニス学会運営委員
- ・日本スポーツパフォーマンス学会編集委員

研究助成等

- ・“スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフスキルの特徴—縦断的調査・第三報— (研究代表者)”, 体育研究所所内研究費, 807,016円.

山内 賢 【教授】

学会発表等

- ・Ken Yamauchi, Hiromichi Hasegawa Akira Ogita, Tutomu Ichikawa, and Shota Kagawa. “Evaluation of Agility and Walking ability in Elderly People”, The Gerontological Society of America (GSA) 2020 Annual Scientific Meeting (ONLINE), November 4-7, 2020.
- ・Akira Ogita, Wakae Murata, Ken Yamauchi, Akiko Sakai, Yoshihiro Yamaguchi, Tanaka Toshio1, and Ken-ichi Fujita, “Anti-aging Effects of Hydrophobic and Hydrophilic Components from Immature Pear Fruits Extract”. The Gerontological Society of America (GSA) 2020 Annual Scientific Meeting (ONLINE), November 4-7, 2020.
- ・Ken Yamauchi, Tsutomu Ichikawa, Akira Ogita, and Shota Kagawa. “Elements of the gait predicting future falls in the elderly”. 53rd Australian Association of Gerontology (AAG) Conference (Online DIGITAL PROGRAM), November 18-20, 2020.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師派遣)

- ・山内賢, “スマートなウォーキングは命の泉”, オープンユニバーシティ, 文教大学生涯学習センター, 2020年5月11日～6月29日 (全8回).
- ・山内賢, “スマートなウォーキングは命の泉”, オープンユニバーシティ, 文教大学生涯学習センター, 2020年9月28日～11月30日 (全8回).

研究助成等

- ・鳥海崇, “大学生および中高生のスポーツ現場におけるマウスガードの認知および利用の実態調査”, 2020年度学事振興資金 (共同研究), 1,000千円.

当年中の研究教育活動の概要

近年、身体活動不足から不健康に陥る危機感や警告が発信されている。座位時間が長くなれば長くなるほど、身体活動不足になる確率が高くなるので、その状況は、心臓病、高血圧、脳卒中、糖尿病、がんなどの非感染性疾患 (NCDs) の発症率増進や、太りすぎ、もしくはサルコペニアに肥満などを助長し、運動機能の減退が原因となる運動器症候群 (ロコモティブシンドローム) を発症させるトリガーになりかねない。また、身体活動不足は、体重増減がもたらす心身面の不安をあおる可能性が高まる危険因子としても認知され、上述の事態を誘発する要因だけにとどまらず、死亡リスクまでも増加するという研究報告もある。さらに、2020年度は新型コロナ感染のパンデミックの中、運動不足環境の不安増進が危惧された一年でもあった。

身体活動不足の改善策は、自粛の中でも「歩行を中心とした身体活動」、「日常生活における歩数の増加」等が国民に広く推奨されている。歩行とは、本来ヒトの基本的な移動手段のことであるが、歩行を身体活動とする場合には「ウォーキング」と称する。「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(スポーツ庁, 2019) の概要によると、ウォーキングはこの1年間に実施した種目、初めて実施した、または久しぶりにやっ

てみようとする種目、今後やってみたいスポーツ種目の中で、それぞれトップであった。「健康のために歩く!」、そのような思いを叶えるウォーキングには、例えばプールで行う「水中ウォーキング」や、通常のウォーキングよりも負荷かかる「山登り」、「専用道具を用いる平地のウォーキング」等、様々な種類がある。専用道具を用いるウォーキングスタイルの中で注目したいのが、「歩行専用の2本のポール」を使った街中でのウォーキングであり、この場合の専用ポールは、歩行補助器具として使用する杖やストレッチポール特性を継承・改良したポールとして、歩行中の重心移動や姿勢矯正、ふらつき（バランス）制御が容易にできて、転倒予防とダイナミックでスムーズな歩容の再現性を考慮した工学デザインが導入されている。また、前方に腕を大きく振り出した後にポールを突くという上下肢、体幹および頭部の動きを同調するトレーナビリティは、良好歩行に必要な重心移動を同調するので、通常のウォーキングよりも、歩行時における深部感覚の刺激が高まるのが予見できるので、その効果を研究テーマにしている。効果測定項目は歩容（歩幅 歩調 歩行比 歩行速度 歩隔）、動画による歩行姿勢のフィードバック、反応時間、気分尺度、脳波、運動活動量と強度、重心移動等である。本年度は、**反応時間と歩容について AAG（オーストラリア老年学会）と GSA（アメリカ老年学会）のオンラインカンファレンスで研究発表した。**現在において、現象論的に予見できることは、ポールを用いるウォーキング継続が、歩行動作に必要な筋力増強の期待よりも運動神経系の方にトレーニング効果があると仮説を立てている。これが正しければ、脳への刺激は通常のウォーキング以上になるので、ここに「歩いて脳トレ」、「身体知ウォーキング」のキャッチコピーを発言する。**本研究の特化性と発展性は以下になる。**

歩行能力の効果測定は測定に必要なある程度の測定空間が必要であろう。例えば10mの歩行距離のようなものである。私の考える空間は、動的測定は3歩、静的測定は0歩（立位）を想定している。この特化した計測で本来の歩行能力測定をカバーできるならば、医療現場、介護施設、家庭内、インストラクターやスポーツクラブ主催のイベントコンテンツとしての導入、コンシューマーゲーム、デンタルケアとの融合等、リハビリテーションやエンハンスメント、エンターティメントの現場で活用できると創造する。

須田 芳正 【教授】

学会発表等

(論文)

- ・福士徳文, 河村剛光, 須田芳正, 石原美彦, 吉村雅文, “サッカーの指導現場において有効活用できる体力テストの検討—サッカー選手の競技力と基本要素, 体力テスト結果の関係から—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 60 (1) : 7-18, 2021.
- ・稲見崇孝, 福士徳文, 東原綾子, 永田直也, 坂井利彰, 須田芳正, 村松憲, 村山光義, 石手靖, 小山亜希子, 中川一紀, “英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア『KEIO 2020 project』の取り組み”, SFC Journal, 20 : 162-182, 2020.
- ・松山博明, 松井健, 馬込卓弥, 辰本頼弘, 巽樹理, 須田芳正, 福士徳文, “アジア育成年代サッカーの実態調査—ブルネイ王国 U-15クラブに着目して—”, 追手門学院大学スポーツ研究センター紀要, 6 : 19-27, 2021.

に修正

- ・鳥海崇, 森文彦, 坂井利彰, 加藤幸司, 吉田泰将, 須田芳正, 石手靖, “大学運動部員を対象としたマウスガードの認知および利用の実態調査”, スポーツ歯学, 24 (1) : 38-43, 2020.

(執筆)

- ・須田芳正, “体育研究所と体育会の連携”, 体育会月報 3月号巻頭言, 2021.

学会発表等

- ・Fukushi, N., Suda, Y., “Coaching of Japanese soccer instructors with experience in Europe”, 25th Annual Congress of the European College of Sport Science, オンライン開催, 2020年10月.
- ・松山博明, 松竹貴大, 須田芳正, 福士徳文, “アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究—

3か国によるアカデミー選手の競技力の実態調査から一”，日本コーチング学会 第32回学会大会（WEB開催），2021年3月。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

- ・早稲田大学オープン教育センター講師（非常勤），“フットサル”，春学期。

（役職）

- ・慶應義塾体育会副理事

研究助成等

- ・“海外での指導経験を有する日本人サッカー指導者からみるコーチングについて（共同研究者：研究代表者 福士徳文）”，福澤基金研究補助，1,000,000円
- ・鳥海崇，“大学生および中高生のスポーツ現場におけるマウスガードの認知および利用の実態調査”，2020年度学事振興資金（共同研究），1,000千円。

野口 和行 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

- ・福士徳文，村山光義，佐々木玲子，野口和行，加藤幸司，永田直也，稲見崇孝，東原綾子，寺岡英晋，“生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”，慶應義塾大学体育研究所紀要，60（1）：19-27，2021。

学会発表等

- ・野口和行，古谷洋祐，中丸信吾，針ヶ谷雅子，竹内靖子，吉松梓“特別な支援や配慮を必要とする人たちを対象とした自然体験活動の実践—新しい生活様式をふまえて—”，2020年度日本野外教育学会オンライン研究大会，オンライン，2020年11月。
- ・Takeuchi, Y., Noguchi, K., “Improving the quality of life for people with disabilities through outdoor camping experiences in Japan” 36th Annual Pacific Rim International Conference On Disability & Diversity, 2021年3月。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

- ・“自然体験活動の意義”“対象の理解”，自然体験活動指導者養成研修会，国立曾爾青少年自然の家，2020年9月。
- ・“アウトドアゲーム指導法”令和2年度自然体験活動指導者セミナー秋編，神奈川県立青少年センター，2021年11月。

（役職）

- ・大学スケート研究会理事長
- ・日本野外教育学会理事
- ・日本氷上スポーツ学会監事
- ・（公社）日本キャンプ協会常務理事
- ・（公財）日本教育科学研究所自然体験活動推進委員
- ・（独）国立那須甲子青少年自然の家スペシャルニーズ・プログラム企画委員会委員

当年中の研究教育活動の概要

特別な支援を必要とする人たちを対象としたキャンプの教育的効果と課題について、引き続き研究と実践を行っている。2020年度から4年間の計画で国立那須甲子青少年自然の家のスペシャルニーズ・プログラム企画開発委員会のメンバーとして、近隣の特別支援学校や施設と連携してプログラム開発及び評価に関わっていく予定である。

吉田 泰将 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

- ・「新型コロナウイルス感染症予防に留意した 中学校における剣道授業の展開 (手引き)」
- ・一般財団法人全日本剣道連盟普及委員会学校教育部会編, 全日本剣道連盟, 2020.8.
- ・「新中学校学習指導要領に準拠した安全で効果的な剣道授業の展開 (ダイジェスト版第4版)」, 一般財団法人全日本剣道連盟普及委員会学校教育部会編, 全日本剣道連盟, 2020.9.

(論文)

- ・Yoshida, Y., Inami, T., Takase, T. Body composition of collegiate kendo players. J Sports Med Phys Fitness, Accepted for publication, 2021.
- ・鳥海崇, 森文彦, 坂井利彰, 加藤幸司, 吉田泰将, 須田芳正, 石手靖, “大学運動部員を対象としたマウスガードの認知および利用の実態調査”, スポーツ歯学, 24 (1): 38-43, 2020.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本武道学会 評議員 通年
- ・一般財団法人全日本剣道連盟 評議員 (6月まで)
- ・公益財団法人全日本剣道連盟 普及委員会学校教育部会・委員 通年
- ・公益財団法人全日本剣道連盟 社会体育指導員養成講習会 講師 通年
- ・文部科学省委託事業・武道等指導充実・資質向上支援強化委員会 委員・通年
- ・一般財団法人全日本学校剣道連盟 常任理事・事務局長 通年
- ・全日本学連剣友会 会長推薦理事 通年
- ・関東学連剣友連合会 副会長 通年
- ・東京学連剣友連合会 監事 通年
- ・慶應義塾体育会剣道部 (三田剣友会) 副師範 通年
- ・慶應義塾大学医学部体育会剣道部 師範代行 通年

(資格)

- ・一般財団法人全日本剣道連盟 剣道教士八段
- ・一般財団法人全日本剣道連盟 審判講師養成指導講師認定

研究助成等

- ・鳥海崇, “大学生および中高生のスポーツ現場におけるマウスガードの認知および利用の実態調査”, 2020年度学事振興資金 (共同研究), 1,000千円.

当年中の研究教育活動の概要

文部科学省委託事業・武道等指導支援強化委員会の委員として、中学校授業協力者の養成とデータベースの構築や授業協力者を活用した授業の視察を行い、さらにアンケート調査やインタビューにより現場の実態を明らかにしていく活動を行っている。本年度には新中学校学習指導要領に準拠した安全で効果的な剣道授業の展開 (ダイジェスト版第4版) を発刊して、全国に配布した。

板垣 悦子 【准教授】

当年中の研究教育活動の概要

- ・今年度は毎年フィールドワークとして拠点を置き講師として活動している慶應義塾大学薬学部主催東京都港区後援の「健康づくり教室」の実施が新型コロナ禍の影響を受けて全てなくなりました。そのために現在は「健康づくり教室」の受講生がコロナ禍前後におけるフレイルの状況、生活習慣および運動習慣に違いが見られるかどうかを薬学部担当者とともに調査アンケートを作成中です。
- ・非常勤で他大学にてリモート授業を実施した際の方策、メリット、デメリットなど、今後のリモート授業の参考とすべく資料作りをしています。

加藤 幸司 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・加藤幸司, “バドミントン・ダブルスゲームの時間構造—混合ダブルスと女子ダブルスについて—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第60巻第1号; 1-6, 2021.
- ・鳥海崇, 森文彦, 坂井利彰, 加藤幸司, 吉田泰将, 須田芳正, 石手靖, “大学運動部員を対象としたマウスガードの認知および利用の実態調査”, スポーツ歯学, 24 (1): 38-43, 2020.

(研究資料)

- ・福士徳文, 村山光義, 佐々木玲子, 野口和行, 加藤幸司, 永田直也, 稲見崇孝, 東原綾子, 寺岡英晋 “生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第60巻第1号; 19-27, 2021.

学会発表等

- ・加藤幸司, “高橋 / 松友ペアはリオ五輪後をどう戦ってきたか—競技会出場記録からみた一考察”, 日本バドミントン学会第3回学会大会, 大妻女子大学, 2020年3月 (大会中止、発表承認)

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本バドミントン学会監事

研究助成等

- ・“大学生および中高生のスポーツ現場におけるマウスガードの認知および利用の実態調査 (共同研究者: 研究代表者 鳥海崇)”, 2020年度学事振興資金 (共同研究), 1,000千円.
- ・“身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究 (共同研究者: 研究代表者 村山光義)”, 2020年度学事振興資金 (共同研究), 300千円.

当年中の研究教育活動の概要

2019年より東京オリンピック出場のためのバドミントン競技選手選考レースが始まり、各国選手の動向に注目が集まっている。トレーニング論の観点から日本国家代表選手の戦略的側面について調査を継続中である。

バドミントンはその競技特性のため、現在の科学的尺度では考量できない事項が多々存在することもあり、残念ながら指導現場と研究現場は期待されるほど十分緊密な関係にあるとはいえないのが現状である。科学的エビデンスを超えらると思われるところのものを無視することをせず、見落とすことなく現場と研究をゆるやかに繋いでいきたいと考えている。

奥山 静代 【准教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(その他)

- ・健康・スポーツ科学女性研究者ネットワーク (NeWS)

研究助成等

- ・“大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る (基盤研究3班) (共同研究者: 研究代表者 村山光義)”, 体育研究所所内研究費, 758,597円.

坂井 利彰 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・稲見崇孝, 福士徳文, 東原綾子, 永田直也, 坂井利彰, 須田芳正, 村松憲, 村山光義, 石手靖, 小山亜希

子, 中川一紀, “英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア『KEIO 2020 project』の取り組み”, SFC Journal, 20:162-182, 2020.

- ・鳥海崇, 森文彦, 坂井利彰, 加藤幸司, 吉田泰将, 須田芳正, 石手靖, “大学運動部員を対象としたマウスガードの認知および利用の実態調査”, スポーツ歯学, 24 (1):38-43, 2020.

(執筆)

- ・坂井利彰, “坂井利彰の目、「身体の切れ良く好判断」 東京中日新聞, 2020年9月
- ・坂井利彰, “坂井利彰の目、「トレーナーと二人三脚実る」 東京中日新聞, 2020年9月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団・こどもの体力・基礎運動能力向上事業・世田谷区ジュニアアカデミー (テニス) 総合監修

(コーチング研修)

- ・公益財団法人日本オリンピック委員会ナショナルコーチアカデミー修了

(解説)

- ・日本放送協会『全日本選手権 2020』, 2020年11月
- ・日本放送協会『ATP ツアーファイナル2020』, 2020年11月
- ・日本放送協会『全豪オープン2021』, 2021年2月

(役職)

- ・慶應義塾体育会副理事
- ・慶應義塾体育会庭球部監督
- ・横浜慶應チャレンジャー国際テニストーナメント・トーナメントディレクター
- ・公益財団法人日本テニス協会 理事 (普及育成本部 副本部長)
- ・公益財団法人日本オリンピック委員会 強化スタッフ (コーチング・マネジメント)
- ・日清食品有限公司 社外取締役

鳥海 崇 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・鳥海崇, 森文彦, 坂井利彰, 加藤幸司, 吉田泰将, 須田芳正, 石手靖, “大学運動部員を対象としたマウスガードの認知および利用の実態調査”, スポーツ歯学, 24 (1):38-43, 2020.

学会発表等

- ・T. Toriumi, H. Fujimoto, “Water Competence of Japanese elementary students”, The 2020 Yokohama Sport Conference, Japan, 2020.09.

研究助成等

- ・鳥海崇, “大学生および中高生のスポーツ現場におけるマウスガードの認知および利用の実態調査”, 2020年度学事振興資金 (共同研究), 1,000千円.

当年中の研究教育活動の概要

2020年8月11日に「ウィズ・アフターコロナ時代に必要な先進的安全水泳教育の紹介」という題目でプレスリリースを発行した。これは多くの小中学校でプールでの水泳授業の中止したことを受けて、映像を見るだけで水難事故防止に役立つ技術について紹介したものである。日本教育新聞社などいくつかのメディアで取り上げられた。詳細については所内研究会報告書に記載した。

永田 直也 【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

- ・福土徳文・永田直也（他7名，6番目），“生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”，慶應義塾大学体育研究所紀要，60（1）：19-27，2021.
- ・永田直也，“アスリートとメンタルヘルス：「学生相談」連絡会議研修会講演記録”，学生相談室紀要，49：13-22，2020年.
- ・藤井慶輔・永田直也，“「現場と研究の橋渡し」（2）にあたって”，バスケットボール研究，6：1-2，2020年.
- ・稲見崇孝・永田直也（他9名，4番目），“英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア『KEIO 2020 project』の取り組み”，SFC Journal，20：162-182，2020.

学会発表等

- ・Naoya Nagata, Takeyuki Arai, & Masaru Takeichi, “Changing errors in the ball motion anticipation task: the number of trials and the amount of illusion”, The 2020 Yokohama Sport Conference, 神奈川, 2020年9月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・“スポーツ心理学”，公益社団法人東京都障害者スポーツ協会主催 令和2年度中級スポーツ指導員養成講習会，東京，2020年10月.
- ・“アスリートのメンタルトレーニング”，埼玉県・一般社団法人埼玉県障害者スポーツ協会主催 令和2年度埼玉パラドリームアスリート事業 スポーツ医科学講習会，埼玉，2020年11月.
- ・共通科目Ⅲ集合講習会講師，公益財団法人日本スポーツ協会主催 令和2年度日本スポーツ協会公認コーチ等養成講習会，2020年12月.

(フィールドワーク)

- ・公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会 スポーツ医・科学・情報サポートスタッフ（心理領域リーダー）.
- ・公益財団法人日本バスケットボール協会 技術委員会指導者養成部会 部会員.

研究助成等

- ・“身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究（共同研究者：研究代表者 村山光義）”，学事振興資金（共同研究），300,000円.
- ・“スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフスキルの特徴—縦断的調査・第三報—（共同研究者：研究代表者 村松憲）”，体育研究所所内研究費，807,016円.
- ・“大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る（基盤研究3班）（共同研究者：研究代表者 村山光義）”，体育研究所所内研究費，758,597円.

当年中の研究教育活動の概要

研究活動は、日本で開催された国際学会大会で発表を行ったが、活動自体は停滞していた。11月からは早川体育研究所研究員と協力できることになったこともあるから、21年度は着実に活動を進めていきたい。

教育活動において今年度は、COVID-19の感染拡大に対応して、春学期は講義をオンラインで、秋学期は実技を対面で実施した。オンラインでの講義は、履修者の声を多く聞くことができ、オンラインで実施することの可能性を感じることが出来た。秋学期の対面での実技は、春学期休講となった分、履修者のスポーツをしたいという熱意を感じることができた。オンライン・対面両方に良い部分があり、それらをうまく使い分けることが今後は重要なのだと感じる年度となった。

福士 徳文 【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・稲見崇孝, 福士徳文, 東原綾子, 永田直也, 坂井利彰, 須田芳正, 村松憲, 村山光義, 石手靖, 小山亜希子, 中川一紀, “英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア「KEIO 2020 project」の取り組み”, Keio SFC Journal, 20 (1): 162-182, 2020.
- ・福士徳文, 河村剛光, 須田芳正, 石原美彦, 吉村雅文, “サッカーの指導現場において有効活用できる体力テストの検討—サッカー選手の競技力と基本要素, 体力テスト結果の関係から—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 60 (1): 7-18, 2021.
- ・福士徳文, 村山光義, 佐々木玲子, 野口和行, 加藤幸司, 永田直也, 稲見崇孝, 東原綾子, 寺岡英晋, “生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 60 (1): 19-27, 2021.
- ・松山博明, 松井健, 馬込卓弥, 辰本頼弘, 巽樹理, 須田芳正, 福士徳文, “アジア育成年代サッカーの実態調査—ブルネイ王国 U-15 アカデミッククラブ選手に着目して—”, 追手門学院大学スポーツ研究センター紀要, 6: 19-27, 2021.

学会発表等

- ・Fukushi, N., Suda, Y., “Coaching of Japanese soccer instructors with experience in Europe”, 25th Annual Congress of the European College of Sport Science, オンライン開催, 2020年10月.
- ・松山博明, 松竹貴大, 須田芳正, 福士徳文, “アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究—3か国によるアカデミー選手の競技力の実態調査から—”, 第32回日本コーチング学会大会, オンライン開催, 2021年3月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・デンソーカップチャレンジサッカー大会実行委員
- ・公益社団法人全国大学体育連合総務部委員
- ・公益社団法人全国大学体育連合研修部委員
- ・日本フットボール学会役員(幹事)

研究助成等

- ・“海外での指導経験を有する日本人サッカー指導者からみるコーチングについて(研究代表者)”, 福澤基金研究補助, 1,000,000円
- ・“身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究(共同研究者: 研究代表者 村山光義)”, 学事振興資金(共同研究), 300,000円
- ・“大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る(基盤研究3班)(共同研究者: 研究代表者 村山光義)”, 体育研究所所内研究費, 758,597円.
- ・“スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフスキルの特徴—縦断的調査・第三報—(共同研究者: 研究代表者 村松憲)”, 体育研究所所内研究費, 807,016円.
- ・“東京2020オリンピック・パラリンピック英国サポート【KEIO 2020 project】を通じたKEIOスポーツレガシーの共創(共同研究者: 研究代表者 石手靖)”, 2020年度未来先導基金, 2,876,000円.(2021年度に活動延期)

当年中の研究教育活動の概要

当年は、サッカー選手の競技力向上に関する研究、生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動の実態に関する研究について、論文・学会発表にて成果発信した。また、スポーツボランティアに関するアンケート調査についても継続して分析を進めている。

稲見 崇孝 【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- Yoshida, Y., Inami, T., Takase, T., “Body composition of collegiate kendo players”, Journal of Sports Medicine and Physical Fitness, Accepted for publication, 2021.
- Murayama, M., Nosaka, K., Inami, T., Shima, N., Yoneda, T., “Biceps brachii muscle hardness assessed by a push-in meter in comparison to ultrasound strain elastography”, Scientific Reports, 10: 20308, 2020.
- Yamaguchi, S., Suzuki, K., Kanda, K., Inami, T., Okada, J., “Changes in urinary titin N-terminal fragments as a biomarker of exercise-induced muscle damage in the repeated bout effect”, Journal of Science and Medicine in Sport, 23: 536-540, 2020.
- Yamaguchi, S., Suzuki, K., Inami, T., Kanda, K., Hanye, Z., Okada, J., “Changes in urinary titin N-terminal fragment concentration after concentric and eccentric exercise”, Journal of Sports Science and Medicine, 19: 121-129, 2020.
- Higashihara, A., Nakagawa, K., Inami, T., Fukano, M., Iizuka, S., Maemichi, T., Hashizume, S., Narita, T., Hirose, N., “Regional differences in hamstring muscle damage after marathon”, PLoS One, 15: e0234401, 2020.
- 稲見崇孝, “画像から読み解けること『超音波画像の活用と今後の見通し』”, Sportsmedicine, 227 : 6-11, 2021.
- 稲見崇孝, “筋の硬さの測定：超音波エラストグラフィ”, Pain Clinic, 41 : 601-608, 2020.
- 稲見崇孝, 福士徳文, 東原綾子, 永田直也, 坂井利彰, 須田芳正, 村松憲, 村山光義, 石手靖, 小山亜希子, 中川一紀, “英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア『KEIO 2020 project』の取り組み”, SFC Journal, 20 : 162-182, 2020.
- 福士徳文, 村山光義, 佐々木玲子, 野口和行, 加藤幸司, 永田直也, 稲見崇孝, 東原綾子, 寺岡英晋, “生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 60 (1) : 19-27, 2021.

(執筆)

- 稲見崇孝, “選ばれる価値を育てる”, 日本臨床スポーツ医学会誌30周年記念誌, 28 : 136, 2020.

(著書)

- モリーズ・シューマン, ベント・ロンネスタッド, 稲見崇孝 (監訳), 峯田晋史郎, 山岸卓樹, 山口翔大, “コンカレントトレーニング”, 東洋館出版, 2021.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- 稲見崇孝, “骨格筋の非侵襲的質的評価と生体内位置情報の取得”, 第64回日本顎口腔機能学会 第62回学術大会優秀賞受賞者企画シンポジウム, オンライン (主幹: 岩手大学), 2020年12月.

研究助成等

- “硬化した筋の回復を加速させる方策 アスリートへの実践的研究 (研究代表者)”, 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金2018-2020).
- “アスリート向けリハビリプログラムに関する共同研究 (共同研究者: 研究代表者システムデザイン・マネジメント研究科 神武直彦)”, 共同研究 (大正製薬株式会社).
- “新常态における身体活動・運動・スポーツの促進とSDGsの達成 (共同研究者: 研究代表者スポーツ医学研究センター 小熊祐子)”, 神奈川県令和2年度大学発・事業提案制度.
- “東京2020オリンピック・パラリンピック英国サポート【KEIO 2020 project】を通じたKEIOスポーツレガシーの共創 (共同研究者: 研究代表者体育研究所教授石手靖)”, 2020年度慶應義塾未来先導基金, 単年度助成金額2,876,000円
- “ヒト骨格筋材質特性の高精度位置情報と機能/形態特性との相互関係に関する研究 (研究代表者)”,

2020年度福澤基金研究補助，単年度助成金額1,500,000円。

- “効果的な指導と対話を支援する遠隔スポーツコーチングシステムの設計と検証（共同研究者：研究代表者システムデザイン・マネジメント研究科神武直彦）”，2020年度学事振興資金部門横断型共同研究，単年度助成金額1,300,000円。
- “スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフキルの特徴—横断的調査・第3報—（共同研究者：研究代表者体育教授村松憲）”，体育研究所所内研究費，807,016円。
- “大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る（基盤研究3班）（共同研究者：研究代表者 村山光義）”，体育研究所所内研究費758,597円。
- “加齢性サルコペニア患者に対する異なる自重エクササイズ後の骨格筋形態特性—生化学マーカーの変化（研究代表者）” 2020年度浅野記念奨励金，単年度助成金額300,000円。
- “身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究（共同研究者：研究代表者 村山光義）”，学事振興資金（共同研究）300,000円。

当年中の研究教育活動の概要

教育と研究の循環を目的に活動を推進した。教育活動は春学期の実技科目が休講となったものの、講義科目についてはオンラインにて実施した。研究活動で特筆すべきは翻訳書籍の制作で、ドイツの執筆者や出版社と度重なるミーティングを行い、年明けの2月に550ページにわたる大作の発刊が無事に叶った。また、10月より、研究員として山口翔大さんの受入を開始した。塾内では部門を横断し、塾外では成果の発信を元にした外部資金獲得など、今後さらに積極的な研究活動を推進したい。なお、以下の講演が COVID-19の影響により中止となった。

- 稲見崇孝，“KEIO 2020 project”，横浜市スポーツ協会セミナー事業スポーツビジネスカンファレンス in 横浜2021，神奈川県，2021年1月。

東原 綾子 【助教】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- Higashihara A., Nakagawa K., Inami T., Fukano M., Iizuka S., Maemichi T., Narita T., Hirose N., “Regional differences in damage among the hamstring muscles after a full marathon”, *PLOS ONE*, 14 (4), e0215352, 2020.
- Hirose N., Tsuruike M., Higashihara A., “Biceps Femoris Muscle is Activated by Performing Nordic Hamstrings Exercise at Shallow Knee Flexion Angle”, *Journal of Sports Science and Medicine*, Accepted for Publication, 2021.
- 稲見崇孝，福士徳文，東原綾子，永田直也，坂井利彰，須田芳正，村松憲，村山光義，石手靖，小山亜希子，中川一紀，“英国代表チーム事前キャンプにおけるスポーツボランティア『KEIO 2020 project』の取り組み”，*SFC Journal*, 20 : 162-182, 2020.
- 福士徳文，村山光義，佐々木玲子，野口和行，加藤幸司，永田直也，稲見崇孝，東原綾子，寺岡英晋，“生活制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”，*慶應義塾大学体育研究所紀要*, 60 (1) : 19-27, 2021.

学会発表等

- 東原綾子，中川剣人，二橋元紀，関口浩文，広瀬統一，“ハムストリングスと大腿四頭筋における筋力比と皮質脊髄路入出力特性との関連”，第75回日本体力医学会大会，オンライン開催，2020年9月
- Maruyama A, Ono K, Sato D, Yamashiro K, Higashihara A, Sueyoshi Y, Eto S. “Changes in cortical excitability of the relaxed forearm dorsal extension muscle during a round rapid wrist movement”, 25th Annual Congress of the European College of Sport Science, Sevilla, Spain, October 2020.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・東原綾子, “スポーツ外傷予防・再発予防に対するリコンディショニングの科学的知見 (ハムストリングス肉離れに対するリコンディショニング)”, 日本アスレティックトレーニング学会ウェビナー講演, 2020年8月
- ・Higashihara A, “Acceleration to Maximum Speed Sprinting–Different Training Methods for Each Phase of Sprint”, Athletics Australia’s Online Coaching Conference, 2021年1月

研究助成等

- ・“ハムストリングス肉離れ受傷後の中枢神経機構の変化分析”, 科学研究費補助金 (文部科学省・日本学術振興会), 若手研究, (18K17865), 780,000円.
- ・“Retrospective and prospective study of the relationship between the trunk neuromuscular control ability and hamstrings strain injury risk” ZENTRUM Rehab and Performance Center との共同研究, 助成金総額 762,537円.
- ・“東京2020オリンピック・パラリンピック英国サポート【KEIO 2020 project】を通じた KEIO スポーツレガシーの共創 (共同研究者: 研究代表者 石手靖)”, 2020年度未来先導基金, 2,876,000円. (※ 新型コロナウイルス感染症の影響により2021年度に繰越)
- ・“身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究 (共同研究者: 研究代表者 村山光義)”, 学事振興資金 (共同研究), 300,000円
- ・“スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフスキルの特徴—縦断的調査・第三報— (共同研究者: 研究代表者 村松憲)”, 体育研究所所内研究費, 807,016円.
- ・“Regional differences in hamstring muscle damage after a marathon”, 2020年度国際学術論文掲載料補助 (タイプ A), 174,224円

当年中の研究教育活動の概要

教育活動では、春学期の体育実技科目の休講となったが、秋学期の授業実施に向けて実技指導法の再検討やオンデマンド授業教材の作成に努めた。また、KEIO 2020 project の活動に携わり、塾生の主体的な活動の推進に努めた。研究活動では、延期となった実験や学会発表もあったが、スポーツ外傷・障害予防を目的とした研究について、これまで取得してきたデータの整理・論文化を行った。また、講演によって研究成果の社会還元を行った。

寺岡 英晋 【助教】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・Eishin Teraoka, “Pedagogies of affect in physical education: exploring teaching for affective learning in the curriculum area of health and wellbeing”, PhD Thesis, University of Strathclyde, 2020.
- ・Eishin Teraoka, Ferreira, H. J., Kirk, D., and Bardid, F., “Affective learning in physical education: a systematic review”, *Journal of Teaching in Physical Education*, Advance online publication, 2020.
- ・福士徳文, 村山光義, 佐々木玲子, 野口和行, 加藤幸司, 永田直也, 稲見崇孝, 東原綾子, 寺岡英晋, “活動制限下における塾生の心身の健康と身体活動に関する実態調査”, 体育研究所紀要, 60 (1): 19-27, 2021.

学会発表等

- ・寺岡英晋, “情意領域の学習成果を促す教師行動を観察・評価する試み”, 日本スポーツ教育学会第40回学会大会, オンライン, 2021年1月.
- ・Eishin Teraoka, and Kirk, D, “Teachers’ and pupils’ views on health and wellbeing in and through physical education in Scottish secondary schools”, 2020 Yokohama Sport Conference, Online, September 2020.

- Kirk, D., Lamb, C., and Eishin Teraoka, “Exploring and developing pedagogies of affect in Scottish secondary schools”, SERA Connects and EERA Network 18 Research in Sport Pedagogy, Online, August 2020.
- Eishin Teraoka, Bardid, F., and Kirk, D. “Behind physical education teachers’ need-supportive teaching and pupils’ views of teachers’ behaviour for affective learning”, 2020 American Educational Research Association Annual Meeting, Online, April 2020.

研究助成等

- “体育授業における情意領域の学習成果を促す教師行動を評価する（研究代表者）”, 慶應義塾学事振興資金（個人研究）, 300,000円.
- “身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究（共同研究者：研究代表者 村山光義）”, 慶應義塾学事振興資金（共同研究）, 300,000円.
- “新常態における身体活動・運動・スポーツの促進とSDGsの達成（共同研究者：研究代表者スポーツ医学研究センター 小熊祐子）”, 神奈川県令和2年度大学発・事業提案制度10,000,000円（事業者負担5,000,000円）.

当年中の研究教育活動の概要

着任初年度となった当年は、コロナ禍により新たなプロジェクトやフィールドワークに取り組むことが困難であったため、これまでの研究成果を整理し、論文執筆及びオンラインでの学会発表に努めた。

2. 所内定例研究会発表要旨

第1回 5月12日

寺岡 英晋

スコットランドの中学校における情意領域の学習成果を促す体育

本発表では発表者の博士論文で取り組んできた研究成果を以下の概要で紹介した。

(1) 情意領域の学習成果を促す教師行動の定量分析

自己決定理論に基づいた観察ツールを用いて、体育教師がどの程度「基本的心理欲求」を支援もしくは阻害する行動をしていたか評価した。特に、教師の「自律性支援」と「構造」の行動が生徒の多元的な情意領域の学習成果に作用することを示した。

(2) 観察された教師行動の自己省察インタビューによる質的分析

教師行動のタイプが異なる3名の教師の授業実践と自己省察インタビューを事例的に紹介した。自律性支援が高い教師ほど、批判的省察能力が高く、「生徒中心」の考え方を有していることを示した。

(3) 現場への提言

教師は体育授業内外において生徒たちとのコミュニケーションをとることで、生徒たちのことをよく知り、信頼関係を築くことで情意領域の学習成果を効果的に生み出すことができると考えられる。

第1回 5月12日

野口 和行

SFCにおける体育実技のオンライン実践

本発表は、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下SFC）における体育実技のオンライン授業の実践を紹介し、現時点でのその特徴と課題を共有し、意見交換をしながら、今後

体育実技をオンラインで実施する際の基礎資料とすることを目的とした。

SFCでは、体育科目が3単位必修で、2年生及び4年生への進級要件となっている。そこで、CISCO社のWebex Meetingを使用したリアルタイムのオンライン授業とし、受講にあたってはPC利用を原則とし、カメラ機能をオンにした状態で事前に全身が映ることを確認し、受講の際は両手両足を広げられる空間を確保した上で、運動のできる服装に着替えた上で授業開始10分前を目安にスタンバイすることとした。この理由としては、1) 実技の授業のため、出席を取ることが必須である、2) 授業時間内に身体活動を行う、3) クラス内のコミュニケーション促進、4) 安全確保が挙げられた。

1年時の必修授業である体育1では、前半4回でグループワーク等を行いながらコミュニケーションの促進を図り、中盤では室内でも実施可能な体力測定、授業用に開発したアプリを使用しながら活動量の測定を行い、後半では、身体の7つのパーツを効果的に動かす活動をクラス内のコミュニケーションを図りながら開発し「SFC体操」を完成させる予定となっている。

多様な種目を予約しながら、合計15回の授業をとってレポート提出で単位認定となる体育2、3では、種目ごとに工夫しながら、室内の限られたスペースで講義やグループワーク、実技を行っている。

オンライン授業の特徴として、1) 運動の苦手な学生にとって取り組みやすい、2) 日常生活に密着した運動習慣に繋がる可能性、3) コミュニケーションの促進（チャットの併用など）、4) 個別の指導がしやすい、が考えられる。一方、オンライン授業における課題として、1) 運動量の確保が困難である、2) 学生の（場合によっては教員の）ネットワーク環境に依存、3) 実技の際の安全管理、4) 使用しているWEB会議システ

ムの問題、がある。

オンライン授業の実施に向けては、1) 授業の目的の明確化、2) WEB会議システムの習熟、3) 緊急対応、4) システムに習熟していない教員に対するサポート、を検討する必要があると考えられる。

第2回 6月16日

加藤 大仁

東京オリンピックを背景とした「スポーツ振興くじ」をめぐる動きについて

ここ数年、スポーツ議員連盟では、野球(NPB)やバスケットボール(Bリーグ)をスポーツ振興くじの対象に加えることが検討されている。スポーツ振興くじ法の立法過程で大きな問題となった八百長の可能性に関しては、コンピューターによる無作為な選択による抽選となるので問題にならないとして、関係各所に理解を求めているようである。法律上くじの対象はサッカーだけに制限されているので、今国会での法改正を目指すとの報道もあったが、日程の関係もあり現時点では改正見送りとなる可能性が高い。また、そもそも野球に関しては、NPB側が極めて消極的な姿勢を示しているのも事実である。

ところで、既に2016年から8年間、スポーツ振興くじの売り上げの10%を「特定金額」として国立競技場の建設費に充てることが法令で定められているが、最近ではオリンピック後の運営費にもスポーツ振興くじの収益を充てることが検討されている。因みに、オリンピック後の国立競技場の運営は民間に委託される方向であるが、具体的な内容についてはオリンピック後に決めることとして先送りされてしまった。毎年24億円程度掛かると言われている維持・改修費、50億円程度とされている固定資産税の支払いなどを考えると、見通しはかなり暗いものと言わざるを得ない。

何れにせよ、オリンピックの招致活動や開催決定を背景に、スポーツ界への資金提供を

増加させる流れが強まったことは事実である。この辺り、「東京五輪」ないし「2020年までに」という合言葉で、様々な施策が繰り広げられてきたこととも軌を一にしている。

今後スポーツ振興くじを拡大させる方便として、「新型コロナウイルスによる収益低下の影響」という言葉が使われることになるのだろうが、ここで改めてスポーツ振興くじ法の立法過程を振り返り、当時の議論と比較すると、ギャンブル性や青少年に対する影響といった論点等は背後に隠れてしまった感がある。

政策を議論するにあたってはフレーミングが大切だが、今回の報告では、「東京オリンピック開催」や「新型コロナウイルス」といった、ある意味例外的な出来事が、スポーツ政策、ひいては都市計画に与える影響についても言及した。

第3回 7月7日

石手 靖

サンド(砂)コートの可能性を探る

2020年3月に日吉記念館建替工事が完了し、これまで第3校舎下バレーボールコートで実施していた体育実技ウィークリースポーツ「バレーボール」の一部は屋内での実施が可能となった。そこで、この屋外コートの有効活用を模索し、サンドコート化の可能性を探った。これまで千葉県館山市塩見海岸(体育会館山合宿所)で毎夏実施している体育実技シーズンスポーツ「ビーチバレー」は、開放的な雰囲気功を奏してか学生に人気の授業である。日吉キャンパス内で同様の種目が実施できれば興味深いと考える。

さて、近年ビーチバレーを代表とするサンドスポーツは、テニス、サッカー、ハンドボール、ラグビー、フレスコボール等、世界各地で盛んに行われている。2019年には第1回ANOCワールドビーチゲームズが開催され13競技36種目が行われた。このような中、砂上

でのスポーツやトレーニングに関する先行研究は国内外において検索することができるが、アスリートの強化、高齢者のリハビリテーション、子供の体力向上や維持等、その効果や安全性については不明な点が多い。それらを明らかにしていくことは研究的価値も認められる。砂上の特徴として、①通常の地面（床）よりも脚部に掛かる負荷が小さい。一方で、水中でのウォーキングと同様、負荷が持続的にかかり続けるという側面もある。②素足での運動も特徴である。足裏が刺激されること、バランスがとりづらいこと、それらに関連して運動のコントロールもかなり難しいこと。③足趾把持筋力へのトレーニング効果があること。

次に人工的なサンドコートの実例として、愛媛県松山市の屋内ビーチスポーツ施設「ひめっこビーチスクール」と「石手川緑地ビーチバレーコート」、米国カリフォルニア州スタンフォード大のサンドコートを紹介する。高額な砂はオーストラリアや東南アジアからの輸入品となり、コスト面を考慮すると国内の川砂利用が現実的と考えられる。今後も日吉キャンパスの第3校舎下バレーボールコートのサンドコート化についてその可能性を検討していきたい。

第3回 7月7日

須田 芳正

プレッシングについて

今回は現代サッカーのキーワードとなっている「プレッシング」について以下の内容で発表した。

- ・現代サッカーにおける守備アクションは、守備陣だけの役割ではなく、ボールを失った後にすべての選手が一つになって、ボールを奪い返すことが原則となっている。
- ・プレッシングには「ハイプレッシング」「ミドルプレッシング」「ロープレッシング」の3つの種類があり、長いリーグ戦、

試合の状況において使い分けることが重要である。

また、塾派遣留学の計画についても発表した。

第4回 10月13日

奥山 静代

ヨガの瞑想

ヨガとは「心のはたらきを止滅することである（ヨーガ・チッタ・ヴリティ・ニローダハ）」と定義づけられており（ヨガスートラ）、ヨガの最終目標は“快適で安定した心をつくること”であると言われている。新型コロナウイルス感染拡大により、自宅でもできる「ヨガ」が注目され、特に「瞑想」や「呼吸法」は心を安定させるために効果があると考えられており、研究会では「瞑想」の実践を行った。瞑想とは五感を鎮め、心を「対象」の一点に結びつけ、意識を極限まで集中させることであり、今の自分と向き合うこと。「今、この瞬間」の感情や思考に意図的に意識を集中し、無になるわけではなく、今おきていることをそのまま穏やかにみることである。瞑想の種類にはいくつかあるが、“呼吸瞑想”を実践した。この瞑想方法は自身の呼吸が浅いか深いか、どんなリズムで行われているか、息を吸ったとき、吐いた時に体のどこが動いているのかを、呼吸の善し悪しは考えずに、気持ちよく呼吸を行いながら観察する方法である。瞑想のポイントは①雑念は必ず浮かんでくるものなので、雑念が浮かんでも、悪いようにとらえる必要はない ②「自分は他のことに意識が向いている」ということに気付いた後に、意識を呼吸に戻す。長く考えすぎず、考えていることに句点「。」を付ける。③背筋を伸ばして楽な姿勢で行う ④静かで落ち着く場所で行う ⑤理想は5～20分程度行うことである。

第5回 11月10日

村松 憲

女子テニス選手のボールの速度と回転量について

発表者はこれまで、テニスにおけるボールの速度と回転量について、世界トップクラスをはじめとする男子選手を対象に研究を行ってきた（村松ほか2010、村松ほか2015a、村松ほか2015b、村松2017など）。競技力向上を目指す男子選手にとっての目標値・目安を呈示することができたと考えている。しかしながら女子選手についてはこれまで報告が殆ど行われておらず、明確な目標値が無いままであった。そこで本研究では3桁台の世界ランキングを所持する女子選手を対象に、国際大会におけるサービスおよびフォアハンドグラウンドストロークのボール速度・回転量を計測した。

考察として、女子および男子のグランドスラムタイトル所持者をはじめとするトップクラスの選手や、男子の世界ランキング3桁台の選手との比較も行った。世界ランキング入りを目指す女子選手にとってのサービスおよびフォアハンドグラウンドストロークのボール速度と回転量の目標値・目安を呈示できたと考えている。

【文献】

村松憲，池田亮，高橋仁大，道上静香，岩嶋孝夫，梅林薫（2010）：世界ランキング50位以内のテニスプレーヤーの国際大会におけるサービス回転量について．スポーツパフォーマンス研究2：220-232.

村松憲，高橋仁大，梅林薫（2015a）：世界トップクラステニス選手のサービスにおける速度と回転量の関係について．テニスの科学23：1-7.

村松憲，高橋仁大，梅林薫（2015b）：世界トップクラステニス選手のフォアハンドグラウンドストロークにおける速度と回転量の関係について．スポーツパフォーマンス研究7：

292-299.

村上俊祐，高橋仁大，村松憲，佐藤文平，佐藤雅幸，小屋菜穂子，北村哲，前田明（2016）：ボール挙動測定器を用いたテニスのサービスのボール速度とボール回転数の解析の可能性．スポーツパフォーマンス研究，8, 361-374.

村松憲（2017）：テニスにおいて「強い」ボールの返球は「弱く」なりやすいのか？：大学生トップクラス選手における一例からの一考察．慶應義塾大学体育研究所紀要，56（1），9-22.

村上俊祐，花木大樹，村松憲，三橋大輔，高橋仁大（2020）：テニスのゲームにおける打球スピードと回転数の実態：ITF 女子サーキット10000ドル大会に出場した選手を対象として，テニスの科学28, 1-12.

第6回 12月10日

坂井 利彰

教育研究の実践

本発表では発表者の研究教育の実践を紹介しました。

発表の前半は、日本テニス協会や日本オリンピック委員会の主催するコーチングライセンス取得のための研修に参加して得た知見などを体育実技（初級テニス、中級テニス、Pearl テニス）、体育学講義（スポーツコーチング概論1・II）、体育会支援、体育会庭球部活動、横浜慶應チャレンジャー国際テニス大会を含めた教育現場への実践について紹介しました。

後半は、育成パスウェイ研究、暑熱対策のコンディショニング研究、InBody を活用した身体組成研究、スタッツを活用したパフォーマンス研究などから得られた医科学データを活用した研究の実践について紹介しました。

最後に発表のまとめとして、今後の研究教育実践の方向性について発表しました。

第7回 1月12日

吉田 泰将

新型コロナウイルス感染症に対する全日本剣道連盟の対応

本題に先立ち、2020年1月から世界中に蔓延した新型コロナウイルス感染症であるが感染拡大防止の観点で、慶應義塾教職員が37.5℃以上の発熱があった場合の申告方法などについて、筆者が12月上旬に体験した事例を報告した。

次に「新型コロナウイルス感染症に対する全日本剣道連盟の対応」について、剣道という種目が抱える飛沫感染の可能性を踏まえて、様々な取り組みが行われていることを紹介した。

慶應義塾体育會剣道部も2020年3月の春合宿の中止、7月7日の活動再開決定まで約4か月に及ぶ休止を余儀なくされた。学生剣道連盟の大会も関東・全日本における個人戦・団体戦（男・女）ともに中止となった。早慶対抗剣道試合（男・女）も中止となった。残念なことに筆者が30年間皆勤してきた寒稽古も中止となった。

これは全日本剣道連盟が、愛知県警察本部が剣道特別訓練員による新型コロナウイルス感染クラスターの発生を報告したことを受けて、4月5日「対面稽古自粛のお願い」を发出したことに従った処置であった。5月17日には「対面稽古自粛継続のお願い」を出し、6月初旬までの自粛を決めた。その後、剣道具製造メーカーによる面マスクの開発や飛沫飛散の可視的実験による飛沫防止対策が構築され、6月10日より「対面稽古自粛のお願い」の解除することとなった。ここで、「稽古再開に向けた感染拡大防止ガイドライン」を策定し、これに準拠して「稽古」「試合」「審査会」などを行うこととなった。面マスク・マウスシールド、アイガード・フェイスシールドの使用、フィジカルディスタンスの確保を徹底して行っている。詳細は全日本剣道連盟ホームページに掲載されているのでご確認い

ただきたい。

備考（参考文献その他）

全日本剣道連盟 ホームページ お知らせ
対面稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン. 2010.6.04

全日本剣道連盟 ホームページ お知らせ
主催大会実施にあたっての感染拡大予防ガイドライン. 2010.8.27

第7回 1月12日

鳥海 崇

水難事故における脱出問題について

2020年は新型コロナウイルスの感染防止を目的として、小中学校で休校や短縮授業が実施された。また、多くの都道府県でプールが閉鎖、水泳授業が取りやめとなった。これらのことから、多くの生徒、児童が空いた時間に川や海といった自然環境下で遊泳した。その結果として、例年より早い時期から水難事故の発生件数が多く、関係者の間では危機感を共有していた。なお、慶應義塾では戦前から「塾生皆泳」という水泳教育の理念があり、「泳ぐ技能を身につけ、親からもらった命を大切にすることは重要な素養のひとつである」という方針で小学生から大学生まで安全水泳指導に関する蓄積がある。これらのことから、安全水泳に関する基礎技能を紹介する目的で8分程度の動画を作成、公開し「ウィズ・アフターコロナ時代に必要な先進的安全水泳教育の紹介」という題目でプレスリリースを発行した。水難事故防止用教材の紹介として日本教育新聞（2020年9月7日版）等に掲載された。

このような水難事故の要因の一つとして脱出問題が挙げられる。これは自然環境下で入水後に水から上がる際、壁際まで移動したものの、陸上に上がることができず、溺死するという問題であり、水難事故を防止するための15の能力（Water Competence）の中の1つでもある。先行研究では足のつかない水面から高さ40cmのプールサイドにあがること

にも困難が生じると報告されている。本報告では、この脱出問題について、水泳授業の履修者を対象としてテストを実施した。テストは水着状態でプールからプールサイドにあがるというものだが、水深と水面からの高さ等で5条件とした。具体的には①水深1.2mから水面と同じ高さに、②水深1.2mから水面から高さ30cmに、③水深2.0mから水面と同じ高さに、④水深2.0mから水面から高さ30cmに、⑤水深3.0mから水面から高さ30cmの浮具に、というものであった。結果として、被験者男子33名のうち①から④にかけては全員クリアすることができた一方で、④では2名、⑤では4名がクリアできなかった。被験者33名の水泳歴〔年〕とBMIとの関連を調べたところ、クリアできなかった被験者は低水泳歴かつ高BMIの部類に属していた。

今回は男子学生のみ、かつ水着状態のみであったが、今後は女子学生を対象として、ライフジャケット状態、着衣状態についてデータを増やして脱出問題の解決策を模索していきたい。

3. 浅野基金・所内研究・基盤研究・学事振興基金・小泉基金報告書

① 浅野均一記念研究奨励金

研究課題

加齢性サルコペニア患者に対する異なる自重エクササイズ後の骨格筋形態特性—生化学マーカーの変化

研究代表者 稲見崇孝

補助額 300,000円

骨格筋の顕著な委縮や筋力低下または身体機能の低下が確認された際にはサルコペニアと診断される。サルコペニアの予防・処置には栄養療法や運動療法が有効であるとされている。運動療法においては、健常者が筋肥大や筋力増強を目的とした時に行う一般的な負荷強度となる最大筋力の60~70%で実施される高負荷レジスタンストレーニングが推奨されてきた。しかしながら、そのような高強度負荷は高齢者に対して高リスクであり、体への負担を考慮すると現実的な方策にはなりえない。さらに、習慣的にトレーニングを実施している50歳以上の日本国民459名を対象にトレーニングの実施場所に関する調査を行った研究では、施設利用者が27.1%だったのに対して自宅が71.6%と、自宅でトレーニングを実施する割合の方がはるかに高い値を示していた。したがってサルコペニアを予防するためには、先行研究で推奨されているように施設を利用して実施する高負荷レジスタンストレーニングに加えて、サルコペニア予防・処置に効果的で、多くの者が自宅で実施可能な低負荷トレーニングを模索していく必要があると考える。

現在、サルコペニア患者に対して有効とされる自宅でも実施可能な低負荷トレーニングは考案されていない。その理由には、先行研究で実施された自重による低負荷トレーニングでは運動強度が足りず、トレーニングによる効果が得られなかった点が挙げられてい

る。一方で、80歳以上の高齢者を対象に、12週間、週に2回、逆回転するペダルに抵抗しながら自転車運動を実施する伸張性収縮サイクリング群と通常のペダリングによって行われる短縮性収縮サイクリング群を比較した結果、伸張性収縮サイクリング群の方が、膝関節伸筋力が有意に増加し、体脂肪量や大腿部脂肪量などが有意に低下したことが報告されている。この実験では、両群の運動量が統制されていたにもかかわらず、伸張性収縮サイクリング群の方が良好な結果が得られた。この知見より、伸張性収縮を強調したトレーニングであれば、自重だとしてもサルコペニア患者の筋力、筋形態、身体機能等の改善に対して有効である可能性が考えられる。したがって本研究の目的は、サルコペニア患者に対して異なる収縮様式の自重エクササイズを実施させ、筋厚などの形態面に加え、筋力や歩行速度などの機能面の変化を明らかにすることとした。

サルコペニア患者9名を対象に、8週間、週に3回以上の伸張性収縮トレーニングを実施させた。測定項目は、体重、体脂肪、BMI、骨格筋量指数、収縮期血圧、拡張期血圧、大腿部筋厚、握力、膝関節伸筋筋の等尺性最大筋力、開眼および閉眼での両脚バランステスト、30秒間の椅子立ち上がりテスト、Timed up and goテスト、2分ステップテスト形態計測、長座体前屈、歩行速度、タイチンN-末端フラグメントとした。これら項目の事前事後の値の差の検定には、マンホイットニーのU検定を用いた。なお、危険率は5%未満をもって有意とした。

結果、骨格筋指数、収縮期血圧、大腿直筋、外側広筋、内側広筋、握力、等尺性最大筋力、30秒間の椅子立ち上がりテスト、2分ステップテスト、形態計測、開眼両脚バランステスト時総軌跡長、閉眼両脚バランステスト時総軌跡長、長座体前屈、歩行速度において有意な改善が認められた ($p < 0.05$)。こ

これらの結果より、自重でのトレーニングであっても伸張性収縮を強調して実施することで、身体組成、筋力、形態、身体機能が顕著に改善される可能性が示唆された。

本研究課題に関する発表

- 1) Yamaguchi, S., Suzuki, K., Inami, T., Kanda, K., Hanye, Z., & Okada, J. (2020). Changes in urinary titin N-terminal fragment concentration after concentric and eccentric exercise. *Journal of sports science & medicine*, 19 (1), 121.
- 2) Yamaguchi, S., Suzuki, K., Kanda, K., Inami, T., & Okada, J. (2020). Changes in urinary titin N-terminal fragments as a biomarker of exercise-induced muscle damage in the repeated bout effect. *Journal of science and medicine in sport*, 23 (6), 536-540.

② 所内研究費

研究課題

スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフスキルの特徴

—縦断的調査・第三報—

研究代表者 村松 憲

補助額 807,016円

本研究は、2019年度採択課題である「スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフスキルの特徴—縦断的調査・第二報—」の第三報である。本年度は、日吉キャンパスで行われる英国チームの事前キャンプのサポートを実際に行う予定であったため、ボランティア経験後の成果や課題などについて各種研究手法を用いて分析し、国内で前例のないオリンピックの事前キャンプボランティアを契機としたスポーツボランティア教育の総まとめの年度となる予定であった。しかしながら、COVID-19の感染拡大により、東京オリンピック・パラ

リンピックが延期になったことから、本研究計画も変更せざるを得ず、今年度もボランティア参加前のデータを収集するのみに留まった。本年度の軸であったボランティア経験後の調査については、来年度も継続して実施していくこととし、以下には、今年度KEIO 2020 projectに入会した学生を対象に実施したアンケート調査の結果を報告する。方法は、2020年度に「KEIO 2020 project アンケート」に回答をした39名（男性：13名、女性：26名）を対象とした。Q1からQ3までの設問は表1に示す。分析には、テキストマイニング手法（KH Coder）を用いた。なお、共起ネットワークにおける分析にあたっては、出現数による語の取舍選択の最小出現数を「10」に設定し、描画する共起関係の絞り込みの描画数を「60」に設定した。また、各設問内にある語については、使用しない語に設定した。

KH Coderを用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った結果を表2に、各設問に対する記述の内容を特徴付ける頻出語の出現回数上位30語を各設問別に表3に示した。次に、この頻出語に対してKH Coderの「共起ネットワーク」のコマンドを用い、各設問に対する記述内容から似通った語（すなわち共起の程度が強い語）を線で結んだネットワークを図1から図3に示した。以下では、各図に示した共起関係をもとに、学生の記述を「」内に抜粋する。なお、文中の“ ”で記しているのは、各図中に現れている頻出語である。Q1（図1）では、「“イギリス” “選手” が慶應で事前キャンプをして“良かつ” と思うように全力で“サポート” していきたい。」などの記述がみられた。Q2（図2）では、「“自分” の“意見” を論理的かつ簡潔に述べる“力”、“相手” の話をきちんと“聞く” 姿勢、そして様子をみながら理由を話すことで、“相手” に伝わりやすくなり、議論がスムーズに進むと思います。」などの記述

がみられた。Q3（図3）では、「英語」で物事を“相手”に伝える“力”。“自分”の意見を言える“積極”性。どのような“相手”であっても進んで“話し”に行けるような社交性。“英語”のミスを恐れず話せる度胸。」などの記述がみられた。これらの記述および頻出語の出現傾向においては、これまでの報告¹⁾²⁾と同様の傾向であり、新たな知見の積み重ねには至らなかった。しかしながら、冒頭にも述べた通り、ボランティア経験後の調査については、2021年度以降も継続して実施し、本研究の総まとめとなるよう塾生の客観的データを蓄積していきたい。

参考文献

- 1) 慶應義塾大学体育研究所（2019）スポーツボランティア参加学生における社会的スキル・自己効力感・ライフスキルの特徴－横断的調査・第一報－. 2018年度慶應義塾大学体育研究所活動報告書. 33-36.
- 2) 福士徳文, 石手靖, 村松憲, 永田直也, 稲見崇孝（2019）学生スポーツボランティア団体【KEIO 2020 project】入会時における自由記述アンケートの分析. 日本体育学会第70回大会予稿集. 74.

表1. アンケートの設問内容

Q1	あなたは東京2020オリンピックのBOAボランティアサポートを通じて、慶應義塾大学の塾生らしく、何をしたいですか？また、何を残したいと思いますか？
Q2	あなたは他者と議論を交わしながら実践していく機会において、重要かつ必要な能力はどのようなものだと考えますか？また、その考えに対して、現時点での自己評価を記載してください。
Q3	あなたは自国・他国を含めた文化の理解を進めるグローバル化・国際化のために必要な能力はどのようなものだと考えますか？また、その考えに対して、現時点での自己評価を記載してください。

表2. 文章の単純集計結果

	文	総抽出語数（使用）	異なり語数（使用）
Q1	168	5,059 (1,959)	856 (693)
Q2	313	5,180 (1,813)	747 (576)
Q3	305	5,196 (1,835)	808 (629)

表3. 各設問に対する頻出上位30語

Q1			Q2			Q3		
順位	語	出現回数	順位	語	出現回数	順位	語	出現回数
1	オリンピック	57	1	意見	110	1	英語	41
2	サポート	42	2	自分	74	2	自分	31
3	選手	38	3	相手	37	3	人	25
4	人	30	4	聞く	24	4	持つ	24
5	ボランティア	29	5	人	19	5	知る	24
6	活動	28	6	理解	18	6	国際	22
7	イギリス	26	7	持つ	17	7	相手	20
8	方々	24	8	発言	17	8	コミュニケーション	18
9	東京	19	9	考え	15	9	言語	18
10	自分	18	10	力	15	10	受け入れる	15
11	スポーツ	17	11	他人	14	11	言う	14
12	日本	17	12	活動	13	12	進める	13
13	交流	15	13	主張	13	13	積極	13
14	塾生	15	14	大切	11	14	違い	11
15	文化	13	15	良い	11	15	国	11
16	機会	12	16	伝える	10	16	日本	11
17	良い	12	17	行動	9	17	話す	11
18	BOA	10	18	言う	8	18	価値	10
19	キャンプ	10	19	自身	8	19	学ぶ	10
20	英国	10	20	尊重	8	20	重要	10
21	慶應義塾大学	10	21	物事	8	21	大切	10
22	英語	9	22	時間	7	22	知識	10
23	学ぶ	9	23	述べる	7	23	力	10
24	競技	9	24	場	7	24	話せる	10
25	経験	9	25	積極	7	25	異なる	9
26	大会	9	26	話	7	26	語学	9
27	知る	9	27	話し合い	7	27	姿勢	9
28	パラリンピック	8	28	意識	6	28	外国	8
29	学生	8	29	感じる	6	29	含める	8
30	参加	8	30	協調	6	30	情報	8

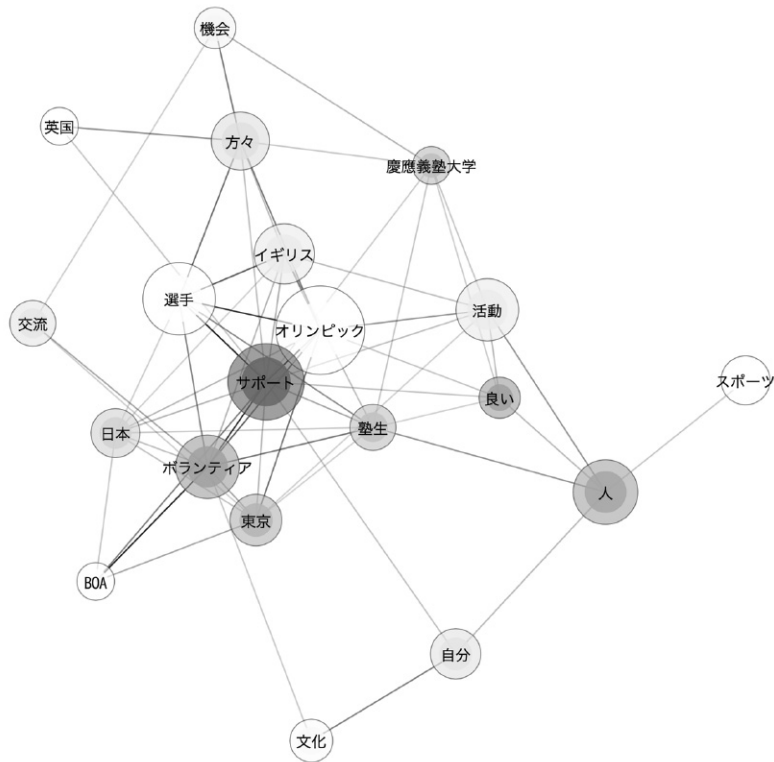


図 1. Q1 についての共起ネットワーク

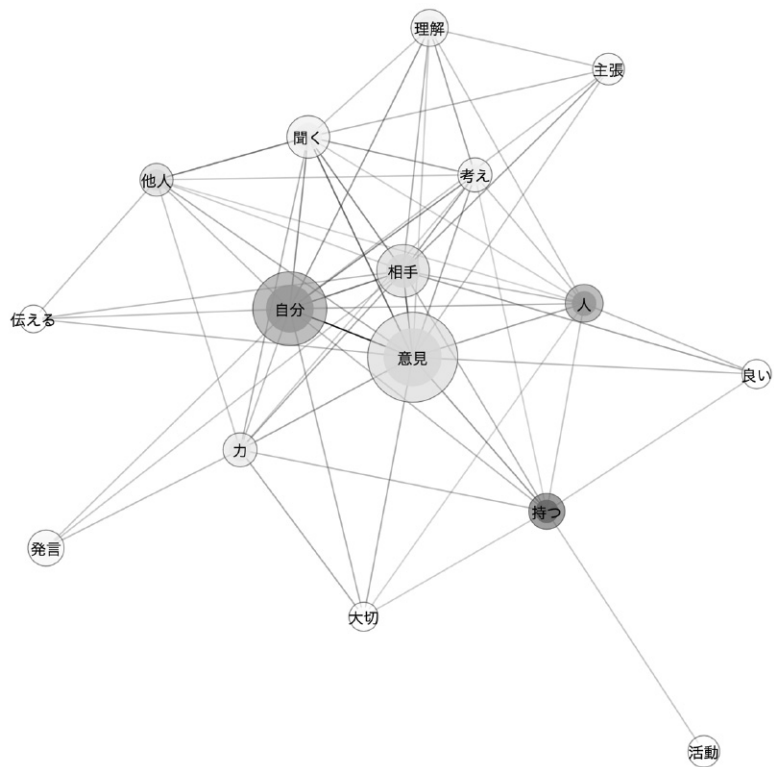


図 2. Q2 についての共起ネットワーク

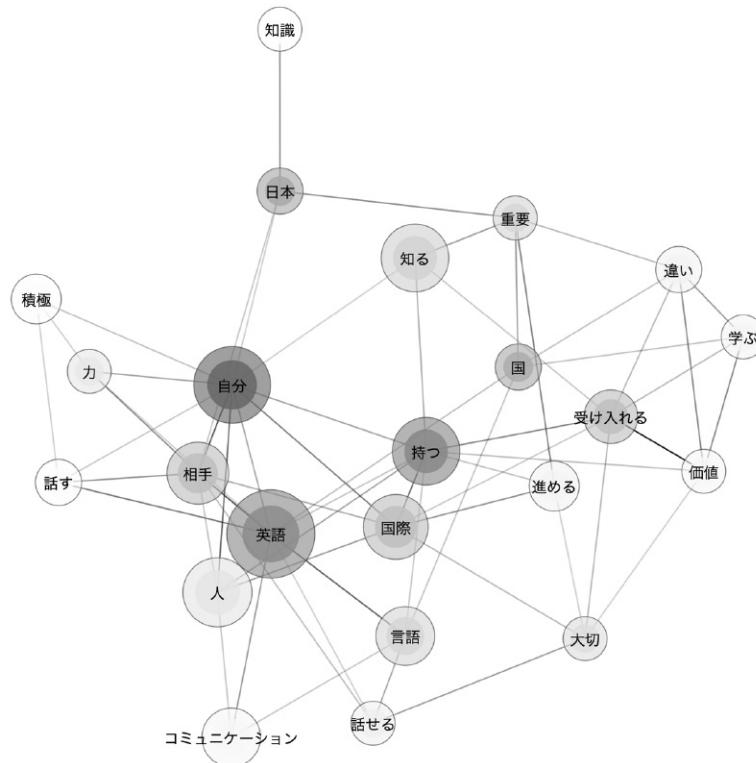


図 3. Q3 についての共起ネットワーク

③ 体育研究所基盤研究

研究課題

基盤研究 コアテーマ③

大学体育の教育理念とカリキュラム
「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」

研究代表者 村山光義

補助額 759,000円

本研究班は「大学教育を取り巻く課題を系統的にまとめ、大学体育への課題として検証するとともに、慶應義塾の実情との関係にも考察を加え、今後の諸策を検討する」ことをねらいとして、継続的に検討を進めてきている。2020年度は COVID-19の影響で、十分に活動できなかったが、(公社)全国大学体育連合関東支部との共催シンポジウムを開催し、大学体育における遠隔授業について議論の場を設けた。以下にその概要をまとめた。

慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

「コロナ禍のオンライン体育実技を振り返る～今後の遠隔実技のあり方と共に～」2021年1月30日(土) Zoom Meetingにて開催。参加者107名(シンポジストらを含む、事前登録者113名)。

COVID-19感染拡大により、体育実技においてもオンライン(遠隔)授業が実施された。遠隔授業の形式はリアルタイム、オンデマンド、それらの併用、対面授業とのハイブリッド型、ハイフレックス型、分散型等、多様であり、各大学において工夫をして対応がとられた。本シンポジウムでは2020年度、遠隔の体育実技がどのように行われたのかを振り返り、その成果と課題を検証した。そして、2021年度からの大学体育のあり方についても考えることとした。以下の4名のシンポジストを招き、各大学の事例を報告してもらった。1)「2020年のオンライン授業対応の概要分析(慶應義塾大学体育研究所:永田直也)」では、関東圏内の大学を中心に、COVID-19感

染拡大下における授業形態や成績評価方法の変化について聞き取り調査を行い、その概要を報告した。2)「コロナ禍の立教大学全学共通科目「スポーツ実習」の工夫～「スポーツスタディ e」の新設、「オンライン授業用スタジオ教室」の設定～(立教大学コミュニティ福祉学部：石渡貴之氏)」では、前期にオンライン授業対応として新たな内容の科目を急遽編成しなおした事例及びオンライン授業専用スタジオの設置について報告してもらった。3)「オンデマンド型「ウエルネスと身体」の展望と課題 ―上智大学必修科目(保健体育研究室)―(上智大学文学部：原仲碧氏)」では、従来から取り組んでいる身体教育を軸とした体育教育をオンラインで実施した事例について報告してもらった。4)「Zoomを用いたオンライン実技の取り組み事例とその課題(芝浦工業大学工学部：石崎聡之氏)」では、遠隔実技の中で特にリアルタイム実施における工夫の事例を報告してもらった。

これらを受け、オンライン授業の振り返りとして、ポジティブな成果や気づきおよびリアルタイム授業の工夫などについてさらにディスカッションをした。リアルタイム形式ではフィットネス・トレーニングシステムの授業内容は概ね良い対応ができたが、スポーツ種目を実施する上では様々な工夫をしたものの難しさがあることが共有された。さらに、大学体育の実施内容として「身体・健康教育」と「スポーツ種目教育」についての考え方について議論を進めた。スポーツ種目を遠隔授業で実施することは、実際の技術習得やその過程の対人コミュニケーションを通じた学びの質保証などに多くの困難と課題があることが共有された。一方で、体育の学びは種目実施のみならず、自己の身体への気づきや日々の運動・トレーニングを通じた健康につなげるべきであり、遠隔授業であっても実施可能な内容がある。我々は、コロナ禍を経て「大

学体育で何を学ぶか」を再考し、新たな時代に進化させていく必要がある。この議論を引き続き深めていくべきであることが多くの参加者から寄せられた。なお、この大学体育の本質的なねらいの議論とともにその評価(成績)が遠隔授業でどうあるべきか、という点も極めて重要であると考えられたが、この点まで話題を広げることができず今後の検討課題としたい。

本シンポジウムの様子は、シンポジストの発表映像および総括文書として体育研究所のホームページ・研究・研究プロジェクトの項にリンクされており、是非を参照いただきたい。本班は今後も「大学体育」の充実に必要な課題解決に議論を進めていくが、大学における教育がCOVID-19を乗り越えてどのように進化すべきかについても注視し、議論を重ねていきたい。(文責：村山)

本研究課題に関する発表

2020年度 慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム「コロナ禍のオンライン体育実技を振り返る～今後の遠隔実技のあり方と共に～」実施報告 2021年2月 ※慶應義塾大学体育研究所ホームページにアーカイブ

④ 学事振興資金

研究課題

大学生および中高生のスポーツ現場におけるマウスガードの認知および利用の実態調査

研究代表者 鳥海 崇

補助額 1,000,000円

「大学生および中高生のスポーツ現場におけるマウスガードの認知および利用の実態調査」という題目で研究助成を受けた。以下の内容を2020年度の研究成果として報告する。

本研究の背景は以下の通りである。大学スポーツは選手の筋量が増大し、競技の速度や

難度が向上するため、その危険性も高くなる。選手の安全を確保するためにはマウスガードの利用を促進することが重要である。これまで我が国のスポーツ現場において、マウスガード利用の実態調査はラグビー競技を中心に積極的に実施されてきた一方で、その多くは特定の競技を対象としたものであり、異なる競技間でのマウスガードの認知および利用の実態を横断的に調べた研究はほとんどない。そこで本研究では大学および学校スポーツのマウスガードの認知とその利用実態を競技横断的に明らかにするため、学校スポーツ選手を対象としてマウスガードの利用実態の比較分析を行うことを目的とした。

慶應義塾体育会所属学生1～3年生1,084名(18-24歳;男子906名、平均年齢19.8歳;女子178名、平均年齢20.2歳)に対して、2019年3月に自記式アンケート調査を行なった。対象競技は米国歯科医師会がマウスガードの着用を推奨する男女のべ30競技(男子20競技、女子10競技)とした。質問項目はマウスガードの認知度、受傷経験、マウスガード使用の有無、使用経験年数等の20項目から構成された。なお本調査に際して、いずれも調査スタッフが現地に赴き、質問内容などが理解できない、あるいは不明箇所がある場合などには、口頭で追加説明を行った。本研究は慶應義塾研究倫理審査委員会の承認を得た(18-012)。この結果に対して競技横断的な比較検討を加えた。

結果として、男子は20競技で対象者数906名、回答率84.0%であった。女子は10競技で対象者数178名、回答率84.3%であった。認知度は競技別平均で男子90.3%、女子82.2%を示した。利用者割合に関してはマウスガードの利用を義務化している競技(ラグビー、アメリカンフットボール、ラクロス、ボクシング、空手)は全て100%であった。アイスホッケーは義務化しているがゴールキーパーのみ例外で、本結果でも着用していないため

91.7%であった。義務化していない競技はバスケットボール(男子)の77.8%とホッケー(女子)の72.0%を除くと全て40%以下であった。口腔外傷経験者割合の競技別平均は男子が35.6%、女子が38.0%であった。また、発生頻度の競技別平均は男子が1.28[回/人]で女子が0.70[回/人]であった。義務化していない競技において、口腔外傷の経験者割合及び発生頻度が競技別平均より高い競技は、ハンドボール(男女)、水球、レスリング、バスケットボール(男子)であった。脳震盪経験者割合の競技別平均は男子が18.3%、女子が10.2%であった。また、発生頻度の競技別平均は男子が0.35[回/人]で女子が0.45[回/人]であった。義務化をしていない競技において、脳震盪の経験者割合が高い、もしくは発生頻度が高い競技はサッカー(男子)、器械体操(女子)であった。

男女ともマウスガードの認知度は高いものの、必要性認識割合、利用者割合の順に低値となり、マウスガードの有用性を周知させる必要性が示唆された。特にマウスガードの装着が義務化されていない競技では、選手に影響を与える指導者を通じた周知が、そして装着が義務化されている競技では、着用に対する不満な点を改善できるカスタムメイドマウスガードについての周知が有効だと示唆された。

本研究課題に関する発表

鳥海崇, 森文彦, 坂井利彰, 加藤幸司, 吉田泰将, 須田芳正, 石手靖, “大学運動部員を対象としたマウスガードの認知および利用の実態調査”, スポーツ歯学, 24(1):38-43, 2020.

研究課題

身体活動制限が塾生の心身に及ぼす影響と体育実技がもたらす効果に関する調査研究
研究代表者 村山光義

補助額 300,000円

2020年度、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応として体育研究所開講の体育実技が春学期休講となった。また、政府による「緊急事態宣言」発令を受け、外出自粛や遠隔授業の実施により学生の活動制限が長期化し、様々な心身の反応が表れることが想定される。本研究では、生活制限下における塾生の心身の健康に関する実態・意識を把握し、さらに、秋学期に再開される体育実技の実施がこれに与える影響・効果について検討することを目的とした。

「生活制限下における運動実施状況および心身の健康に関する実態・意識を調査するアンケート」を作成し、塾生を対象に2020年10月と12月にWebによる調査を行った。質問内容は①運動実施状況及び生活状況、②精神的健康状態表(WHO-5)、③社会的スキル尺度(Kikuchi's Scale of Social Skills-18 items: Kiss-18)、④国際標準化身体活動質問表(International Physical Activity Questionnaire: IPAQ)、⑤ライフスキル評価であった。第1回目の回答者(874名)について、2回目の回答を依頼し、561名から回答を得た。最終的な有効回答は548名となり、この内、体育実技履修者は380名、非履修者は168名であった。

秋学期の運動実施状況・新たな友人ができた人数について体育実技履修の有無で比較をすると、両者には χ^2 乗検定による有意な差が示された。体育実技を含まず定期的に運動を実施した割合は、62.9%:42.9%、全くしなかった割合は2.9%:29.8%、新たに5人以上友人が増えた割合は、56.4%:34.0%、友人ができなかった(0人)割合は12.3%:29.2%(それぞれ履修者:非履修者)であった。また、春学期から秋学期にかけて運動状況が改善した学生のうち88%(129名)が体育実技履修者であった。この結果から、体育実技履修が日常的な運動への動機づけ、さらに友人

を増やす機会として一定の効果をもたらした可能性が考えられた。

WHO-5およびKiSS-18の平均値について、1回目と2回目の得点を比較したところ、いずれも体育実技履修者と非履修者の間には分散分析によって交互作用が認められ、WHO-5は履修者で向上、KiSS-18では非履修者でやや低下の傾向が示された。IPAQによる身体不活動時間、ライフスキルの得点においては履修者と非履修者に交互作用は認められなかった。しかしながら、体育会に所属しない1年生に限定した比較においては、身体不活動時間、ライフスキルにおいても履修者(273名)と非履修者(113名)の間に交互作用が認められた。

以上の結果から、秋学期における体育実技の履修が運動実施状況の改善、幅広い校友関係、良好な精神的健康状態、社会的スキルの獲得に寄与し、体育会に所属しない1年生においては目標設定や感謝する心などのライフスキル得点の向上にも効果的であったことが示された。

研究課題

体育授業における情意領域の学習成果を促す教師行動を評価する

研究代表者 寺岡英晋

補助額 300,000円

体育授業の教育的役割として、自律的に運動に取り組む意欲に代表される「情意領域」の学習成果を保証していくことが重要であるとの認識が近年高まっている。しかし、今日まで多くの体育授業が授業中の運動量や運動強度の確保を中心的課題として考えられてきた背景から、情意領域の学習成果を促す効果的な指導方略の開発やその有効性の検証はあまり行われてこなかった。本研究ではその足がかりとして、体育授業における情意領域の学習成果を最大限に引き出す教師行動を明らかにすることを目的とした。

教師行動の評価項目を設定するにあたり、情意領域の学習成果を促す教師行動を示し得る理論的枠組みとして「自己決定理論」を用いた。文献調査と自己決定理論に精通している専門家との協議を通して全62項目を設定した。学習成果を支援する教師行動として「自律性支援」と「構造」の領域が構成され、学習成果を阻害する教師行動として「統制」と「無秩序」の領域で構成された。データ収集に関しては、当初の計画では横浜市内の中学校体育教師に調査協力を依頼する予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、学校訪問は叶わなかった。そのため、これまでの研究活動で蓄積していたデータを用いて、設定した評価項目の実用可能性を探るための予備的な計量分析を進めることにした。データ分析には中学校体育教師19名に通常通りの体育授業を実施してもらった様子を1台のビデオカメラで撮影したビデオ録画を使用した。教師にはワイヤレスマイクを装着してもらい、教師が発した音声を映像と同期させながら記録した。教師行動の分析は専門家2名で記録されたビデオを見ながら、それぞれ独立して行った。1つのインターバルを5分間に設定し、インターバル毎にビデオを停止させ、評価項目に沿って0（全く当てはまらない）から4（とても当てはまる）の5段階でコーディングを行った。項目毎に合計されたスコアをインターバル数で割り平均スコアを算出した。評価者間信頼性と評価者内信頼性を示す級内相関係数はそれぞれ0.85と0.83であった。統計処理については、各領域の内的整合性を評価するために Cronbach の α 係数を求めた。また、領域相互の関連を評価するために Pearson の相関係数を求めた。

分析の結果、「自律性支援」と「構造」では Cronbach の α 係数が0.7以上を示し、内的整合性は妥当であると判断できた。一方で、「統制」「無秩序」では α 係数が0.7に満たなかった。領域間の関連では、「自律性支

援」が「構造」と有意な正の関連を示した ($r = 0.67, p < 0.01$)。

本研究では情意領域の学習成果を促す教師行動の根拠を自己決定理論に求め、それを観察・評価しようと試みた。少ないサンプル数であったが、「自律性支援」と「構造」で評価項目の信頼性を得ることができ、互いに正の関連を示したことは、情意領域の学習成果を支援する教師行動を観察するツールとして活用できる可能性を示したと考えられる。一方で、阻害行動の領域では内的整合性を確保できず、今後は評価項目の内容の改訂と精査が求められる。また、観察ツールとしての実用性を高めていくため、より大きなサンプル数で計量分析を行っていくことが今後の課題である。加えて、今後サンプル数を増やしていくにあたり、一律で単元の間あたりの授業を分析することで一般化可能性を保證できると考えられる。

なお、本研究の成果は日本スポーツ教育学会第40回大会においてオンラインでポスター発表を行った。

本研究課題に関する発表

寺岡英晋（2020）情意領域の学習成果を促す教師行動を観察・評価する試み。日本スポーツ教育学会第40回学会大会，2021年1月15日—2021年1月25日，オンライン。

Ⅲ. 教育活動記録

Ⅲ－１．授業の実施（教育委員会）

本年度の体育学講義は通年オンラインでの実施となり、体育学演習と体育実技は秋学期のみの開講で、科目によっては対面とオンラインを組み合わせた授業形態で実施した。以下に詳細な履修者統計と授業評価の結果を示し、本年度教育活動の報告とする。

１．2020年度体育科目履修者統計

1) 体育学講義と体育学演習

2020年度は体育学講義の名称を、春学期に開講する科目は体育学講義Ⅰ、秋学期に開講する科目は体育学講義Ⅱとして新たに設置した。体育学講義Ⅰは5コマ、体育学講義Ⅱは4コマ、体育学演習は1コマを開講した。体

育学講義の担当者と履修状況を表Ⅲ-1-1に、体育学演習の担当者と履修状況を表Ⅲ-1-2に示す。履修者の合計は、体育学講義で761名（前年比89%）、体育学演習で14名（前年比156%）であった。体育学講義の履修者数は前年と比べて減少したが、総コマ数が前年と比べて5コマ減少していることを踏まえると、1コマあたりの履修者数は約20名増加している結果になった。また、体育学講義は通年オンライン形式で実施し、体育学演習は秋学期に対面形式で実施した。前年度までとは異なる授業形態となったが、今年度も多くの塾生に体育・スポーツ科学に関わる学習の機会を提供することができた。同時に、引き続き適切な定員の設定、開講科目の整理、開催曜日・時限の検討が求められる。

表Ⅲ-1-1. 2020年度 体育学講義の担当者及び履修状況

授業名	科目名	担当者	履修者数
体育学講義Ⅰ	スポーツコーチングとアスレチックトレーニング論	山内 賢	90
	スポーツ統計学の基礎	鳥海 崇	118
	スポーツコーチング概論（理論）	坂井 利彰	98
	パフォーマンス心理学	永田 直也	212
	メガスポーツ・イベント論	石手 靖、稲見 崇孝、永田 直也、村松 憲、村山 光義	61
体育学講義Ⅱ	健康とスポーツの科学	山内 賢、有馬ふじ代、井ノ口美香子、奥山 静代、武田 彩乃、三戸 麻子、横山 裕一	29
	スポーツコーチング概論（実践）	坂井 利彰	91
	スポーツ進化論	村山 光義、永田 直也	34
	ハイパフォーマンスとトレーニング科学	稲見 崇孝	28
合 計			761

表Ⅲ-1-2. 2020年度 体育学演習の担当者及び履修状況

科目名	担当者	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
BLS（ベーシックライフサポート）演習	山内 賢	20	17	0.85	14	70%

2) 体育実技 A・B

2020年度における体育実技 A（ウィークリースポーツクラス）は春学期は大学キャン

パスの閉鎖に伴い全面休講とし、秋学期は対面形式もしくは一部オンライン形式を組み合わせながら実施した。表Ⅲ-1-3に体育実技

表Ⅲ-1-3. 2020年度 体育実技 A（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担 当 者	種 目
教 授	佐々木玲子	エアロビクス
〃	石手 靖	バレーボール
〃	村山 光義	バレーボール, フライングディスク, レクリエーションスポーツ
〃	加藤 大仁	バスケットボール
〃	村松 憲	テニス
〃	山内 賢	フィットネストレーニング, スマートウォーキング
〃	須田 芳正	サッカー, フットサル
〃	野口 和行	バレーボール, レクリエーションスポーツ, バックカントリースキル (バックパッキング, カヤック)
准 教 授	吉田 泰将	剣道
〃	板垣 悦子	ボディコンディショニング (ピラティス)
〃	加藤 幸司	バドミントン
〃	奥山 静代	ボディコンディショニング (エアロビクス&ヨガ), ボディメイクエクササイズ
〃	坂井 利彰	テニス
専 任 講 師	鳥海 崇	水泳, 水球
〃	永田 直也	バスケットボール
〃	福士 徳文	フットサル
〃	稲見 崇孝	フィットネストレーニング
助教 (有期)	東原 綾子	ソフトボール
〃	寺岡 英晋	卓球
非常勤講師	赤井 宏司	ソフトテニス
〃	朝飛 大	柔道
〃	浅海 友峰	サッカー
〃	厚母 宗子	太極拳
〃	五十嵐 元	バレーボール
〃	伊藤 洋平	サッカー
〃	梅本 雅之	水泳
〃	小幡 典子	アーチェリー
〃	風間 善明	軟式野球
〃	勝又 正浩	ゴルフ
〃	金指みの利	バレエエクササイズ
〃	木塚 孝幸	バスケットボール
〃	木林 弥生	卓球

	担 当 者	種 目
非常勤講師	久保田正美	空手
〃	河乃 建仁	気功
〃	小林さと子	フェンシング
〃	小松 鮎実	バドミントン
〃	四戸 紀秀	フットサル
〃	島田桂太郎	ボクシング
〃	首藤 聡史	器械体操
〃	杉本 亮子	ボディコンディショニング (ヨガ&ピラティス)
〃	鷺見 全弘	水泳
〃	高橋 一真	フットサル
〃	高橋 伸子	卓球
〃	竹村りょうこ	テニス
〃	常行かおり	卓球
〃	寺田 好秀	テニス
〃	藤平 信一	合気道
〃	鳥屋 智大	テニス
〃	西村 忍	フィットネストレーニング
〃	原 荘太郎	テニス
〃	樋口 裕輔	水泳
〃	布川友紀子	ゴルフ
〃	細野 雅歳	バレーボール
〃	宮田 幸典	トランポリン
〃	宮本 千晶	テニス
〃	矢作 拓也	バレーボール
〃	吉宇田和泉	ボディコンディショニング (ファンクショナルボディメイク)
〃	吉田 英雄	自動車

A (ウィークリースポーツクラス) の担当者
とそれぞれの種目、表Ⅲ-1-4に体育実技A
(ウィークリースポーツクラス) の種目別履
修状況を示す。日吉・三田・芝共立合計で
3242名の申込 (前年比 58%) に対し、最終的
に2698名の履修者 (前年比 60%) となった。
秋学期のみの開講を考慮すれば、前年からの
減少率 50% 以下に抑えられたことは評価で
きる。さらに、定員に対する充足率は全体
で 68% となり、前年より 13.2% の増加となっ

た。体育実技B (シーズンスポーツクラス)
はスケートのみを開講した。表Ⅲ-1-5に示
した通り、スケートの履修者数は31名で充足
率は 77.5% であった。新型コロナウイルス感
染症拡大の影響による身体活動制限下におい
て、多くの塾生が体育実技A・Bに参加し、
仲間と交流する機会を提供できたことは非常
に意義のあることだったと考えられる。

表Ⅲ-1-4. 2020年度 体育実技A（ウィークリースポーツクラス）種目別履修状況

地区	科目名	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
日吉地区	アーチェリー	40	40	1.00	34	85%
	合気道	30	19	0.63	19	63%
	エアロビクス	80	80	1.00	62	78%
	空手	28	13	0.46	12	43%
	気功	75	55	0.73	43	57%
	剣道	80	13	0.16	12	15%
	ゴルフ	126	115	0.91	92	73%
	サッカー	240	216	0.90	187	78%
	自動車	60	53	0.88	40	67%
	柔道	60	7	0.12	6	10%
	水泳	210	111	0.53	95	45%
	スマートウォーキング	20	20	1.00	16	80%
	ソフトテニス	20	17	0.85	14	70%
	ソフトボール	96	86	0.90	78	81%
	太極拳	36	21	0.58	16	44%
	卓球	252	203	0.81	177	70%
	テニス	375	334	0.89	269	72%
	トランポリン	30	30	1.00	25	83%
	軟式野球	30	29	0.97	22	73%
	ハンドボール	60	36	0.60	33	55%
	バスケットボール	360	310	0.86	258	72%
	バドミントン	140	140	1.00	112	80%
	バレエエクササイズ	60	60	1.00	52	87%
	バレーボール	490	372	0.76	312	64%
	フィットネストレーニング	200	199	0.99	152	76%
	フットサル	300	252	0.84	229	76%
フライングディスク	25	25	1.00	20	80%	
ボディコンディショニング	190	189	0.99	147	77%	
レクリエーションスポーツ	70	67	0.96	55	79%	
日吉合計		3783	3112	0.82	2589	68.4%
三田・芝地区	テニス	56	41	0.73	35	63%
	剣道	20	6	0.30	6	30%
	合気道	30	13	0.43	11	37%
	ボディコンディショニング	80	70	0.88	57	71%
	三田・芝合計		186	130	0.70	109
全体合計		3969	3242	0.82	2698	68.0%

表Ⅲ-1-5. 2020年度 体育実技B（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

科目名	担当者	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
スケート	小山 正	40	31	0.78	31	77.5%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、体育実技を履修した学生による授業評価を長年継続的に実施し、より適切な授業展開のための基礎資料を得て、授業改善に取り組んでいる。専任教員に加え、非常勤講師（ウィークリースポーツ）においても2011年度秋学期よりweb方式によるアンケートの回収を継続している。

本年度は新型コロナウイルス感染症および東京オリンピック・パラリンピックの影響により春学期の体育実技ウィークリー種目およびスケートを除くシーズンスポーツを休講としたことから、春学期においては講義科目のみ、シーズンスポーツはスケートのみの集計となった。アンケート実施に際しては、授業終了4週間前より入力可能として、回答人数を把握することにより、未実施者に対しては残りの授業で実施を促した。

以下、集計を行った。表Ⅲ-1-6はアンケート回答者数、表Ⅲ-1-7、8にはアンケート調査用紙の質問項目を示した。アンケートの各質問項目には「強くそう思う」（5点）、「そう思う」（4点）、「どちらとも言えない」

（3点）、「そうは思わない」（2点）、「全くそう思わない」（1点）の5段階で回答させ、得点化して評価した。Web方式によるアンケートでは、回答の時間に制限がないため、自由記述に意見を書きやすいというメリットがあるが、回答率は紙面方式より低下しており、各教員が積極的にアンケートへの回答を促す努力を継続していた。本年度は授業のオンデマンド化により学生による授業連絡の確認が慣習化したこと、そして、各教員によるアンケート周知努力により、回答数が飛躍的に伸びた（前年比：春学期講義・演習 2.8倍、秋学期講義・演習 2.4倍、秋学期ウィークリー 4.3倍）。

表Ⅲ-1-6. 授業評価アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	—
秋学期ウィークリー	1335
春学期講義・演習	200
秋学期講義・演習	66
シーズン	4

表Ⅲ-1-7. 授業評価アンケート質問項目（講義・演習・実技）

履修者全員（講義・演習・実技）回答	
設問1	曜日時限を選択してください
設問2	実施地区を選択してください
設問3	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問4	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問5	教員の指導・教授方法は適切であった
設問6	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問7	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問8	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問9	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問10	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問11	この授業によって知識を深めることができた
設問12	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問13	この授業の内容は興味のあるものだった
設問14	このクラスの雰囲気は良好であった
設問15	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ

実技履修者のみ回答	
設問16	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問17	この授業によって運動技術が向上した
設問18	運動量は適切であった
講義・演習履修者のみ回答	
設問19	配布資料やプレゼンテーションが適切であった
自由記述	
設問20	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問21	授業内容について記入してください（良かった事）
設問22	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問23	担当教員について記入してください（良かった事）
設問24	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問25	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問26	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問27	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

表Ⅲ-1-8. 授業評価アンケート質問項目（シーズンスポーツ）

選択肢からの回答	
設問 1	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問 2	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問 3	教員の指導・教授方法は適切であった
設問 4	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問 5	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問 6	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問 7	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問 8	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問 9	この授業によって知識を深めることができた
設問10	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問11	この授業の内容は興味のあるものだった
設問12	このクラスの雰囲気は良好であった
設問13	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
設問14	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問15	この授業によって運動技術が向上した
設問16	運動量は適切であった
自由記述	
設問17	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問18	授業内容について記入してください（良かった事）
設問19	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問20	担当教員について記入してください（良かった事）
設問21	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問22	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問23	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問24	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

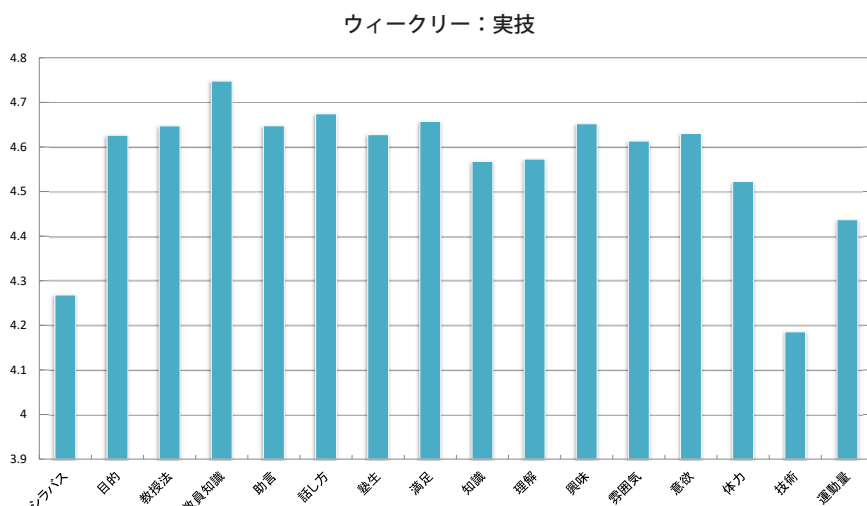
1) 秋学期体育実技ウィークリー種目の授業評価

秋学期体育実技ウィークリー種目における質問項目別5段階評価(平均値±標準偏差)を図Ⅲ-1-1に示した。表Ⅲ-1-9には種目別の5段階評価を示した。結果をみるとほぼ例年と同様の傾向であり、以下のようにまとめられる。

春・秋の学期間に差はほぼなく、同じ傾向が得られている。全般に4点以上の肯定的評価が多かった。平均値で最も高い評価となった項目は、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」(4.75±0.23)であり、「教員の指導・教授方法は適切であった」(4.65±0.21)、「教員は授業への学生の参加を

促し、適切に助言した」(4.65±0.20)、「教員の話し方は聞き取りやすかった」(4.67±0.25)等教員に対する評価に加え、「満足度」(4.66±0.21)も高い値を示した。

一方、最も平均点が低いものは「自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した」であった(4.27±0.26)。このことは、曜日や時限による制約から単に時間割を埋めるために履修していたり、第1希望の種目に抽選漏れした学生が他の種目を履修していたりすることが考えられる。また、「この授業によって運動技術が向上した」についても平均点が低く(4.19±0.34)、限られた授業時間の中でも技術習得を実感できるような工夫が必要であり、今後の課題である。



図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の5段階評価 (秋学期実技ウィークリー全体平均)

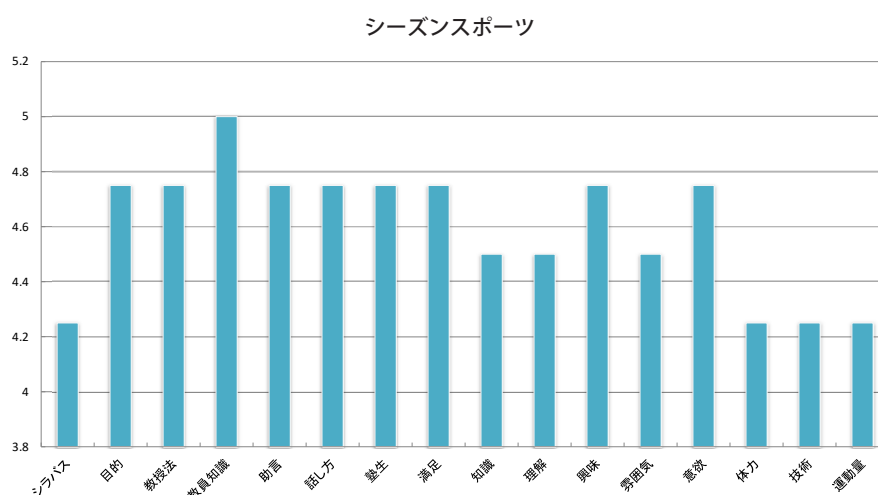
表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧（秋学期ウィークリー）

種目名	回答数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	16	平均	3.94	4.31	4.25	4.31	4.25	4.31	4.31	4.25	4.25	4.06	4.44	4.31	4.38	3.88	3.69	3.75
		標準偏差	0.66	0.46	0.56	0.98	0.56	0.68	0.46	0.75	0.56	0.56	0.50	0.85	0.48	0.78	0.85	0.83
エアロビクス	52	平均	4.29	4.67	4.77	4.75	4.54	4.77	4.69	4.67	4.48	4.58	4.65	4.52	4.60	4.62	4.17	4.46
		標準偏差	0.63	0.47	0.42	0.58	0.69	0.42	0.46	0.47	0.54	0.49	0.48	0.60	0.60	0.49	0.75	0.60
エアロビクス&ヨガ	17	平均	4.47	4.65	4.71	4.71	4.53	4.82	4.71	4.88	4.47	4.59	4.71	4.59	4.71	4.53	3.76	4.47
		標準偏差	0.78	0.59	0.46	0.46	0.61	0.38	0.57	0.32	0.50	0.49	0.46	0.49	0.46	0.50	1.00	0.50
ゴルフ	49	平均	4.14	4.59	4.61	4.86	4.35	4.78	4.65	4.71	4.69	4.51	4.80	4.49	4.69	4.41	4.51	4.43
		標準偏差	0.95	0.57	0.72	0.49	0.77	0.46	0.56	0.53	0.68	0.64	0.45	0.73	0.61	0.90	0.70	0.67
サッカー	50	平均	4.06	4.48	4.52	4.70	4.52	4.70	4.72	4.76	4.30	4.54	4.68	4.66	4.64	4.68	4.44	4.50
		標準偏差	0.97	0.61	0.54	0.50	0.57	0.54	0.49	0.51	0.90	0.57	0.55	0.55	0.62	0.58	0.83	0.73
スマートウォーキング	5	平均	4.20	4.60	4.60	4.00	4.80	4.60	4.60	4.80	4.80	4.60	4.60	4.80	4.80	4.80	3.80	4.80
		標準偏差	0.75	0.49	0.49	1.55	0.40	0.49	0.49	0.40	0.40	0.49	0.49	0.40	0.40	0.40	0.98	0.40
ソフトテニス	6	平均	4.50	4.13	4.08	4.05	4.14	4.08	4.01	4.08	4.07	4.01	4.01	4.14	4.14	4.14	3.75	4.13
		標準偏差	0.50	1.40	1.39	1.46	1.38	1.39	1.37	1.40	1.39	1.36	1.36	1.40	1.40	1.41	1.25	1.39
ソフトボール	33	平均	4.24	4.61	4.70	4.82	4.67	4.79	4.70	4.76	4.61	4.61	4.79	4.76	4.70	4.67	4.45	4.61
		標準偏差	0.74	0.49	0.46	0.39	0.47	0.41	0.46	0.43	0.60	0.49	0.41	0.43	0.52	0.47	0.56	0.49
テニス	162	平均	4.27	4.68	4.68	4.81	4.61	4.67	4.75	4.71	4.55	4.68	4.74	4.72	4.72	4.66	4.44	4.53
		標準偏差	0.80	0.54	0.54	0.39	0.69	0.60	0.53	0.57	0.63	0.49	0.52	0.56	0.50	0.63	0.72	0.73
トランポリン	10	平均	4.50	4.90	4.80	5.00	4.80	4.70	4.80	4.70	4.80	4.70	4.90	4.70	4.90	4.50	4.50	4.80
		標準偏差	0.50	0.30	0.40	0.00	0.40	0.64	0.40	0.40	0.46	0.40	0.30	0.46	0.30	1.20	0.50	0.40
レクリエーションスポーツ	38	平均	4.39	4.45	4.58	4.63	4.61	4.63	4.47	4.45	4.53	4.42	4.42	4.55	4.55	4.34	3.76	4.21
		標準偏差	0.54	0.50	0.49	0.74	0.54	0.48	0.60	0.68	0.64	0.54	0.54	0.50	0.55	0.66	0.96	0.69
バスケットボール	142	平均	4.10	4.60	4.56	4.73	4.63	4.66	4.57	4.63	4.41	4.57	4.56	4.68	4.62	4.75	4.43	4.47
		標準偏差	0.94	0.54	0.62	0.56	0.35	0.60	0.62	0.55	0.81	0.60	0.63	0.52	0.54	0.52	0.74	0.71
バドミントン	43	平均	4.07	4.42	4.67	4.74	4.56	4.42	4.44	4.58	4.56	4.37	4.65	4.60	4.67	4.67	4.28	4.28
		標準偏差	0.92	0.58	0.47	0.49	0.54	0.75	0.58	0.58	0.58	0.61	0.52	0.62	0.52	0.56	0.90	0.69
バレエエクササイズ	32	平均	4.69	4.59	4.53	4.59	4.53	4.81	4.63	4.56	4.44	4.50	4.75	4.56	4.63	4.41	4.16	4.22
		標準偏差	0.46	0.55	0.56	0.82	0.66	0.39	0.54	0.70	0.83	0.56	0.43	0.79	0.70	0.74	0.79	0.93
バレーボール	179	平均	4.02	4.59	4.70	4.72	4.70	4.73	4.69	4.74	4.49	4.57	4.75	4.77	4.74	4.64	4.42	4.56
		標準偏差	1.02	0.53	0.51	0.54	0.48	0.47	0.48	0.47	0.67	0.56	0.43	0.47	0.46	0.55	0.71	0.56
ハンドボール	9	平均	4.56	4.67	4.44	4.78	4.67	4.56	4.67	4.67	4.67	4.56	4.56	4.56	4.56	4.33	4.33	4.44
		標準偏差	0.50	0.47	0.50	0.42	0.47	0.50	0.47	0.47	0.47	0.50	0.50	0.50	0.50	0.47	0.67	0.50
ピラティス	21	平均	4.67	4.95	5.00	5.00	4.95	5.00	4.86	4.86	4.76	4.86	4.90	4.95	4.90	4.90	4.29	4.71
		標準偏差	0.47	0.21	0.00	0.00	0.21	0.00	0.35	0.35	0.43	0.35	0.29	0.21	0.29	0.29	0.82	0.45
フィットネストレーニング	63	平均	4.60	4.78	4.75	4.87	4.71	4.73	4.65	4.76	4.73	4.75	4.75	4.60	4.71	4.79	4.44	4.48
		標準偏差	0.55	0.45	0.50	0.38	0.52	0.54	0.51	0.46	0.48	0.47	0.47	0.55	0.45	0.44	0.68	0.59
フットサル	88	平均	3.85	4.53	4.68	4.83	4.67	4.69	4.63	4.70	4.47	4.57	4.73	4.63	4.67	4.70	4.33	4.61
		標準偏差	1.10	0.58	0.47	0.38	0.49	0.49	0.57	0.55	0.69	0.62	0.52	0.63	0.58	0.59	0.82	0.53
フライングディスク	20	平均	4.20	4.60	4.50	4.65	4.60	4.60	4.45	4.40	4.25	4.45	4.45	4.40	4.40	4.45	4.10	4.35
		標準偏差	0.68	0.49	0.59	0.57	0.58	0.49	0.59	0.49	0.62	0.50	0.50	0.49	0.58	0.50	0.62	0.57
ファンクショナルボディメイク	16	平均	4.44	4.69	4.69	4.81	4.63	4.63	4.56	4.63	4.56	4.63	4.63	4.38	4.63	4.69	3.94	4.50
		標準偏差	0.61	0.46	0.46	0.39	0.48	0.60	0.50	0.48	0.50	0.48	0.48	0.78	0.48	0.46	0.66	0.50
ヨガ	6	平均	4.17	4.33	4.67	4.67	4.50	4.50	4.67	4.67	4.33	4.50	4.67	4.67	4.50	4.67	4.00	4.33
		標準偏差	0.69	0.75	0.47	0.47	0.50	0.50	0.47	0.47	0.75	0.50	0.47	0.47	0.50	0.47	1.00	0.75
ヨガ&ピラティス	14	平均	4.43	4.57	4.29	4.64	4.57	4.79	4.36	4.36	4.57	4.57	4.43	4.14	4.29	4.29	3.86	3.93
		標準偏差	0.49	0.49	0.88	0.48	0.49	0.41	0.61	0.72	0.49	0.49	0.62	0.74	0.59	0.59	0.83	0.80
気功	18	平均	4.17	4.44	4.44	4.78	4.50	4.00	4.39	4.50	4.44	4.39	4.56	4.33	4.39	4.06	3.50	4.06
		標準偏差	0.76	0.50	0.68	0.42	0.76	1.11	0.68	0.60	0.68	0.59	0.50	0.88	0.49	0.91	1.12	0.85
空手	11	平均	4.64	4.73	4.82	5.00	4.91	4.91	4.82	4.82	4.73	4.64	4.73	4.82	4.55	4.73	4.73	4.73
		標準偏差	0.48	0.45	0.39	0.00	0.29	0.29	0.39	0.39	0.45	0.48	0.45	0.39	0.66	0.45	0.45	0.45
剣道	10	平均	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.86	4.86	4.86	5.00	4.86	4.71	4.57	4.71	4.57	4.71
		標準偏差	0.93	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.35	0.35	0.35	0.00	0.35	0.45	0.73	0.45	0.49	0.45
合気道	17	平均	4.59	4.94	4.94	5.00	4.94	5.00	4.94	4.94	4.88	4.71	4.94	4.76	4.82	4.71	4.59	4.71
		標準偏差	0.69	0.24	0.24	0.00	0.24	0.00	0.24	0.24	0.32	0.46	0.24	0.42	0.38	0.46	0.60	0.57
自動車	12	平均	4.67	4.75	5.00	5.00	4.92	4.92	4.83	4.83	4.92	4.83	4.92	4.83	4.83	3.42	4.08	4.08
		標準偏差	0.62	0.43	0.00	0.00	0.28	0.28	0.37	0.37	0.28	0.37	0.28	0.37	0.37	1.44	1.26	0.95
柔道	1	平均	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.00	5.00
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
水泳	45	平均	4.13	4.69	4.69	4.78	4.49	4.62	4.64	4.71	4.47	4.71	4.67	4.51	4.60	4.78	4.51	4.47
		標準偏差	0.91	0.46	0.51	0.55	0.65	0.53	0.60	0.50	0.81	0.45	0.56	0.69	0.57	0.42	0.69	0.78
太極拳	5	平均	4.00	4.40	4.40	4.80	4.60	4.20	4.20	4.20	4.40	4.20	3.80	4.60	4.40	4.20	3.40	4.20
		標準偏差	0.63	0.49	0.49	0.40	0.49	0.40	0.75	0.75	0.49	0.75	1.47	0.49	0.49	0.40	1.02	0.40
卓球	137	平均	4.11	4.58	4.68	4.77	4.61	4.65	4.57	4.63	4.62	4.50	4.62	4.61	4.62	4.39	4.26	4.38
		標準偏差	0.91	0.51	0.50	0.44	0.56	0.53	0.56	0.60	0.56	0.62	0.56	0.59	0.59	0.72	0.85	0.74
軟式野球	8	平均	3.75	4.75	4.63	4.88	4.88	5.00	4.88	4.88	4.63	4.75	4.88	4.88	4.88	4.75	4.63	4.50
		標準偏差	1.20	0.43	0.48	0.33	0.33	0.00	0.33									

2) シーズンスポーツ種目（スケート）の授業評価

シーズンスポーツ種目（スケート）における5段階評価（平均値±標準偏差）を図Ⅲ-1-2および表Ⅲ-1-10に示した。2020年度のシーズンスポーツはスケートのみ実施され、さらに新型コロナウイルス感染症の影響により、横浜銀行アイスアリーナにて実施された。授業評価はすべての項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。特に「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」（5.0±0.0）、「教員は授業の目的

および目標をわかりやすく説明した」、「教員の指導・教授方法は適切であった」、「教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した」、「教員の話し方は聞き取りやすかった」、「この授業は塾生にとってふさわしいものだった」、「この授業は自分にとって満足出来るものであった」（いずれも4.75±0.5）などが高い得点を示した。一方、「この授業によって運動技術が向上した」（4.25±0.5）、「運動量は適切であった」（4.25±0.96）は他の項目と比較して低い値を示した。



図Ⅲ-1-2. 授業に関する質問項目別の5段階評価（シーズンスポーツ平均 ※2020年度はスケートのみ）

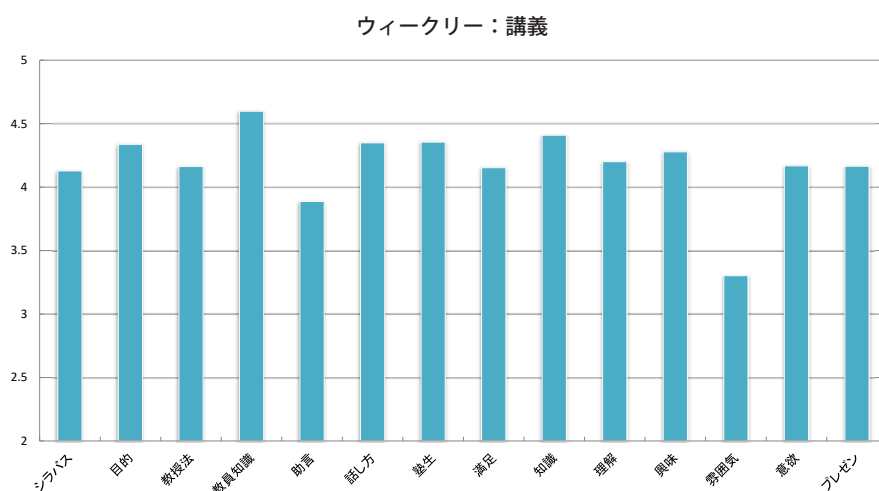
表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧（シーズンスポーツ）

種目名	回答数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
スケート	4	平均	4.25	4.75	4.75	5.00	4.75	4.75	4.75	4.75	4.50	4.50	4.75	4.50	4.75	4.25	4.25	4.25
		標準偏差	0.50	0.50	0.50	0.00	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.58	0.58	0.50	0.58	0.50	0.50	0.50
シーズン全体	4	平均	4.25	4.75	4.75	5.00	4.75	4.75	4.75	4.75	4.50	4.50	4.75	4.50	4.75	4.25	4.25	4.25
		標準偏差	0.50	0.50	0.50	0.00	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.58	0.58	0.50	0.58	0.50	0.50	0.50

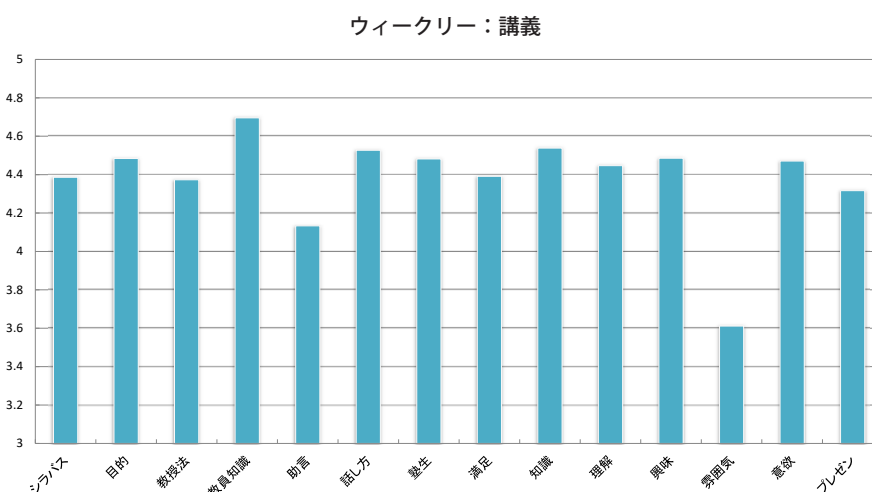
3) 講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価についての結果を図Ⅲ-1-3（春学期）、図Ⅲ-1-4（秋学期）に示した。多くの項目において平均値が4点をこえる肯定的評価が得られている。特に昨年度同様、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」は高い値を示した。（春：4.60±0.18、秋：4.70±0.25）。しかしな

がら、本年度の講義はオンデマンド授業であったことから双方向の授業運営が難しかったことから、「教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した」（春：3.89±0.20、秋：4.13±0.13）および「このクラスの雰囲気は良好であった」（春：3.30±0.11、秋：3.61±0.13）については他の項目に比べて低評価となった。



図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期全体平均）



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義全体平均）

3. 通信教育対象科目

1) 体育理論

レポートおよび試験問題の出題・採点を、加藤幸司君、永田直也君で担当した。

2) 体育実技スクーリング

2020年8月に「スマートウォーキング」「ピラティス」の2種目（いずれも「スポーツセミナー」という2単位の授業）を開講する予定であったが、新型コロナウイルスの影響でいずれも休講となった。

4. 塾内における授業担当

日吉および三田において開講される体育研究所設置の体育科目及び通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目に加え、各学部の設置科目の開講についても協力している。2020年度の他学部設置科目及び担当者を表Ⅲ-1-11に示す。

表Ⅲ-1-11. 塾内における授業担当及び協力

授業科目名	担当者	開講学部など	曜日時限など
薬学生のための体験学習プログラムF	板垣 悦子	薬学部	春・秋学期水曜6時限
体育1	野口 和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜3時限
体育2～5	野口 和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜2時限 秋学期月曜2・3時限
人体の科学	佐々木玲子 村山 光義	理工学部	秋学期水曜5時限

Ⅲ－２．スポーツイベントの開催 (スポーツ振興委員会)

1．塾内競技大会

2020年度は新型コロナウイルスの感染症状況を踏まえ塾内競技大会の開催は見送られた。

2．公開講座

教職員向けの公開講座を下記のように計画していたが、新型コロナウイルスの感染症状況を踏まえ開催は見送られた。

趣 旨：イベントを通して（１）自分自身の健康状態を見つめ、（２）個々の心と身体を整え、（３）教職員同士のつながりを深めることでウェルビーイングを高める。

日 程：2020年12月7日（月）から2021年1月15日（金）の期間のうち、いずれか5日間

開催時間：18:00～19:00

会 場：記念館フロアもしくはスタジオ

参加費：無料

内 容：第1回 ヨガ（担当：奥山）
第2回 ピラティス
（担当：板垣）
第3回 ソフトバレー
（担当：寺岡）
第4回 ボッチャ（担当：永田）
第5回 テニス（担当：坂井）
各回で心理測定や体成分測定を実施（担当：永田・稲見）

3．所内施設の開放

2020年度は新型コロナウイルスの感染症拡大防止のため、協生館トレーニングルームの開放、協生館プールの開放、多目的コートの貸し出しは行わなかった。

Ⅲ－３．他機関との連携

1. 一貫校連携

I. 幼稚舎館山遠泳合宿（水泳指導教員）

講師：鳥海崇

2020年度は中止となった。

II. 幼稚舎体育特別授業

講師：須田芳正

2020年度は中止となった。

2. 体育会支援

石手 靖 体育会参与

吉田 泰将 剣道部師範、医学部剣道部師範代行

須田 芳正 体育会副理事

鳥海 崇 体育会副理事

坂井 利彰 体育会副理事、庭球部監督

IV. 業務活動記録

IV. 業務活動記録

2020年度総務分野関係報告

1 人事

- (1) 就任（昇格）
鳥海 崇君（准教授）
- (2) 就任（新任）
寺岡英晋君（助教（有期））

2 塾内役職

- (1) 大学寄宿舍舎監
野口和行君
- (2) 大学寄宿舍委員会委員
野口和行君
- (3) 大学教養研究センター運営委員
石手 靖君（所長）
- (4) 大学教養研究センター所員
石手 靖君・佐々木玲子君・村山光義君・
加藤大仁君・村松 憲君・山内 賢君・
吉田泰将君・野口和行君
- (5) 大学学生総合センター副部長（日吉支部）
村山光義君
- (6) 体育会副理事
須田芳正君
坂井利彰君
鳥海 崇君
- (7) 体育会参与
石手 靖君（所長）
- (8) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員
石手 靖君
- (9) 立科山荘運営委員会委員
野口和行君
- (10) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
野口和行君
- (11) 日吉記念館運営連絡協議会委員
石手 靖君・加藤幸司君・鳥海 崇君
- (12) 慶應義塾研究倫理委員会研究倫理審査委員会
佐々木玲子君
- (13) 大学保健管理センター運営委員
石手 靖君（所長）

- (14) 大学スポーツ医学研究センター運営委員
石手 靖君（所長）
- (15) 日吉キャンパス衛生委員
山内 賢君
- (16) Hiyoshi Research Portfolio（HRP）運営委員
石手 靖君（所長）
- (17) 通信教育部学務委員
村松 憲君

3 研究所内役職の主なもの

- (1) 所 長
石手 靖君
- (2) 人事委員会委員
石手 靖君・佐々木玲子君・村山光義君・
加藤大仁君・村松 憲君・須田芳正君・
野口和行君・山内 賢君
- (3) 学習指導主任
村松 憲君
- (4) 学習指導副主任
永田直也君
- (5) 総務委員会委員長
奥山静代君
- (6) 教育委員会委員長
村松 憲君
- (7) 研究委員会委員長
鳥海 崇君
- (8) スポーツ振興委員会委員長
野口和行君
- (9) 将来構想委員会委員長
坂井利彰君
- (10) 活動報告書編集委員会委員長
奥山静代君

4 その他

特記事項なし。

（主事 千葉 徹）

Appendix.

東京2020大会に向けた取り組み
『KEIO 2020 project 2020年度活動報告』

Appendix.

東京2020大会に向けた取り組み

『KEIO 2020 project 2020年度活動報告』

■2020年度の活動の総括

2020年東京オリンピック・パラリンピックの事前キャンプで日吉キャンパスを訪れる英国チームをサポートする学生ボランティア組織として2016年度からスタートさせた本プロジェクトであるが、2020年度は東京オリンピック・パラリンピック開催の記念すべき年となり、KEIO 2020 projectの活動においても集大成の一年となることが期待されていた。しかし、春先以降、世界中で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な感染拡大にともない、オリンピック・パラリンピック史上前例のない大会の「延期」が決定した。同様に、事前キャンプも予定の変更を余儀なくされることになった。義塾においても、安全を最優先に卒業式や入学式等の諸行事を延期ないしは中止せざるを得ず、その後、政府による緊急事態宣言を受けて大学キャンパスは一時閉鎖、授業は対面型からオンライン型に切り替わることとなった。

このような状況の中でも、KEIO 2020 projectメンバーは工夫を凝らし、オンラインでの活動を中心に可能な限り受け入れ準備活動を展開した。各種活動にあたっては、未来先導基金および所内研究費の採択を受けており、限られた活動範囲ではあったが、学生主体の活動を支えることができた。体育研究所では、活動代表者として石手靖君、人文社会領域アンケート担当として村山光義君、地域スポーツ振興教育担当として村松憲君、オリンピズム教育（国内）担当として須田芳正君・坂井利彰君、ボランティア活動教育担当として永田直也君・福土徳文君・東原綾子君・寺岡英晋君、国際交流教育・他教育機関ジョイント担当・プロジェクトコーディネーターとして稲見

崇孝君がチームとなって学生の主体的な活動をサポートした。それぞれの助成に対する活動報告は以下を参照されたい。

◆参照

□2020年度未来先導基金：

(http://www.dff.keio.ac.jp/activity/programs/2020/04_detail.html)

□体育研究所所内研究費：p11を参照

活動の詳細は、「活動の足跡」として次項に記載する。活動のコンセプトはこれまでと同様、2020年に開催されるオリンピック・パラリンピック大会において実際にボランティア活動を行うまでに、経験・実践・準備しておくべき活動・取り組みを学生主体で考え、学び、その過程で培った力をもって British Olympic Association（以下、BOA）・British Paralympic Association（以下、BPA）を最大限にサポートすることである。体育研究所としては KEIO 2020 project の活動を推進するにあたり、本プロジェクトに関わる学生自らが“知り”、“考え”、“養う”過程で蓄積・形成される【人間の生きる力】を育成するために、学生主体の活動を支えながら成長を促す教育的側面と、本プロジェクトを通して学生がどのように成長・変容したかなどを、各種研究手法を用い分析・検証する研究的側面を合わせ、教育研究機関としての使命を全うしたい。

2020年度は、制約が多く不自由な状況下であり、企画・イベント数は例年に比べると大きく減った。しかし、苦しい状況の中でも活動を継続する強い意志を持ち、学生がアイデアを出し合い実現した企画もあった。今後も継続して若い世代の豊かな人間の醸成を促す精神的なレガシーをスポーツの側面から確立する【KEIO スポーツレガシー】を共創していきたい。

■2020年度 活動の足跡

1. 日吉キャンパスバリアフリーマップ製作活動（通年）【図1】【図2】

BOA・BPAが日吉キャンパスを拠点に活動を行うことから、そのサポートを目的として2019年5月より開始された日吉キャンパスバリアフリーマップ製作活動を継続した。本活動はまた、「もう一つのオリンピック」と呼



図1 日吉記念館調査の様子

ばれるパラリンピックに関わる活動を契機に多様性の尊重と、障がい者を理解する“心のバリアフリー”を塾内外に発信し、浸透させることを狙いとし、当該領域の専門家とともに問題提起・課題解決を目指している。本マップは障がい者など異なる条件を有する方々と共に作り上げることで障がい等に対する理解を深める過程を重要視している。

マップ作成には構想段階から経済学部・日吉心理学教室・中野泰志教授や車いすユーザーの方々のご協力を得ながら、マップ完成に向け塾長室、協生環境推進室、日吉運営サービスとの協議を重ねてきた。また、新・日吉記念館の完成を受け、新たにバリアフリー状況の調査とオンラインミーティングを複数回にわたり実施し、マップ編集を行っており、2020年度末にはマップの総仕上げ段階に入っている。

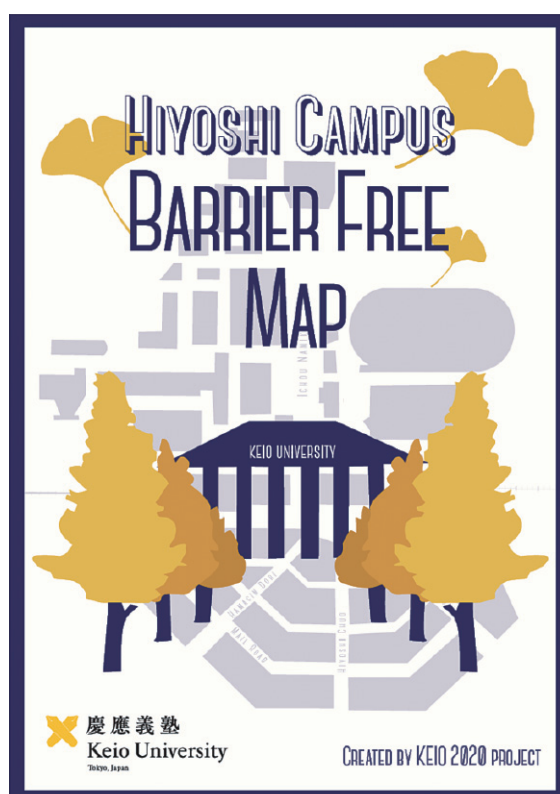


図2 マップ表紙（2021年2月現在）

2. 慶應スポーツ SDGs シンポジウム2020における活動紹介動画展示（8月18日オンラインにて開催）【図3】

延期されていたシンポジウム（2月29日に開催予定であった）がオンライン開催に形を変えて開催された。このシンポジウムは、東京2020イヤーに考える“持続可能なスポーツ・身体活動について行うべきこと”を発信するため、慶應義塾大学スポーツ医学研究センターおよび大学院健康マネジメント研究科によって共同開催されたもので、これまでの活動を紹介動画として展示した。KEIO 2020 projectのこれまでの活動の軌跡はもちろんのこと、今後の展望を動画にまとめた。

Let's bring Britain to Hiyoshi!

We sent our members to the U.K. in 2018 and 2019. Those who joined the trip learned the three mindsets listed below by communicating with the members of the British Olympic Association (BOA) and the British Paralympic Association (BPA). We will keep these principles in mind when we provide support for the athletes during the Pre-Games camps in 2020.

1. "Home from Home"
 ~Tokyo 2020 is not an away game. We will make Tokyo our Home.~
 "Home from Home" is a concept which aims to create an environment that would make the athletes feel like they are at home in the U.K. This will help to get the best performance out of the British athletes.
 The BOA and BPA have their own building in the Olympic and Paralympic Village and are planning to decorate the whole facility with Union Jacks. They are also planning to prepare a place where the athletes and staff can meet and relax with their friends and families.

2. "Everyday is a first day"
 ~Keep the motivation high day in day out.~
 During the games, each day might be just a regular day for the staff, but for the athletes, that one day might be their first day in Tokyo or the most important day of their lives when they compete in the games. It is crucial that the members provide maximum support for the athletes to get their best performances until the last minute of the games.
 Supporting the athletes with "day 1" attitudes are required for all the members of KEIO 2020 project and any other supporting members during the games.

3. "Never fully prepared"
 ~Prouse preparation.~
 It is impossible for the athletes to join the competition in their best forms without the preparation done by the staff. BOA and BPA are considering to set up exclusive facilities such as analyzing rooms and training rooms for the British athletes. They are preparing these facilities before 2020 which will be a higher quality than the shared facilities in the Olympic and Paralympic Village.
 The U.K. was the first foreign country to have their own building in the Olympic and Paralympic Village, which indicates their passion for their preparation.

On these mindsets, the KEIO 2020 project will

- Deliver high quality support to the athletes day in day out (Athletes are our top priority)
- Create an environment that the athletes can feel at home

We will give 100%!

For more information, please visit <https://ps.keio.ac.jp/keio2020/institute-of-physical-education-at-keio-university-keio-2020-project/>

Keio University student sports volunteer organization for TEAM GB and Paralympics GB

KEIO 2020 project

支える、繋げる、届ける。

~Support, Unite, Deliver~

Who are we?
 As official student organization, the KEIO 2020 project is working under the president of the university and the Institute of Physical Education at Keio University. Leading up to the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games, we are making a connection between Britain and Japan. We want to connect the visiting athletes with the local communities through sports.

What are the pre-Games training camps?
 The pre-Games training camps are held for the national athletes to get themselves into good physical condition before entering the Olympic and Paralympic Village. In July and August 2020, the British athletes will train in the Hiyoshi Campus facility at Keio University and at the facilities in Yokohama City and Kawasaki City.

The 4 goals
 We are working to achieve the following goals.
 ① To help the athletes reach their top physical fitness level before entering the Olympic and Paralympic Village.
 ② To work with the cities of Yokohama and Kawasaki to vitalize the communities surrounding Keio University.
 ③ To learn about British culture & share Japanese Culture.
 ④ To create a legacy that continues after the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic games are finished.

For more information, please visit <https://ps.keio.ac.jp/keio2020/institute-of-physical-education-at-keio-university-keio-2020-project/>

What do we do in KEIO 2020 project?

It is a once-in-a-lifetime opportunity to have the 2020 Olympic and Paralympic Games in Tokyo and to welcome the athletes from the U.K. to our campus. We would like to not only to provide the support for the Olympians and Paralympians, but also to get to know the U.K. and strengthen our ties with the local community. We hope to maintain all the relationships we build throughout our activities. Here is a simple diagram showing how KEIO 2020 project works.

The followers of our official LINE account are members of Keio community who are interested in our project. We constantly share information about our volunteer work and other activities to create opportunities for them to engage in.

The graph below shows the transitions in the number of followers of the KEIO 2020 project's official LINE. We see a growing interest in our organization year by year, which shows the rising expectations and excitement for the 2020 Games within the university.

Official LINE account followers

Some of our LINE account followers belong to the steering committees. They are responsible for the actual operation of the KEIO 2020 project. Their role is to be involved in various projects, from planning to running events. For example, attending the regular meetings to contribute to administrative decision-making, as well as participating in one or more of the "Sports Units (SU)" to fully prepare for the training camps in the summer of 2020.

Steering committee

Main members

What are Sports Units (SU)?
 SU support the athletes. It is necessary for us to gain related sports knowledge such as athletes' jobs, rules and proper manners. SU has formed to gather knowledge through research for the project members. There are 12 SUs right now, Taekwondo, Fencing, Rowing, Boxing, Hockey, Modern pentathlon, Karate, Judo, Weightlifting, Swimming, Gymnastics, and Table tennis(2020/2/18).

Our main members are the central figure that drive the KEIO 2020 project forward. They support the organization's activities by discussing its management policy and organizational structure, as well as organizing steering committees meetings.

For more information, please visit <https://ps.keio.ac.jp/keio2020/institute-of-physical-education-at-keio-university-keio-2020-project/>

① Make Hiyoshi the best environment for the athletes! (sports)

【Preparing to support the British athletes】



We made signs in English!



To get to know the athletes, we printed pictures of them and listed their profiles!



【Cooperation with the varsity teams of Keio Univ.】



We learned how to use sports equipment!

【Cheering for the British athletes】



【Hosting the British team】



We received thank you messages from the British athletes!



Based on what we have learned from our experiences, we can confidently support the British athletes during the Pre-Games training camps so that they can give their best performances in the games! !

For more information, please visit <https://ipeds.jp/keio.ac.jp/keio2020/> Institute of Physical Education at Keio University (KEIO 2020 project)

② Vitalize the communities surrounding Keio University!

【Citizens' Festival】



We shared some time with the local residents at the Tsuzuki Festival and at Kohoku Fureai Festival for 2 years in a row!

【Volunteering at Yokohama Marathon】



We joined in a big sports event and experienced volunteering! We gave our best to support the runners!

【TOKYO GAME ONDO】



We practiced the dance a lot!

【Sitting Volleyball Event】



We learned about and became more interested in Paralympic sports with local elementary school students!

【Hiyoshi British Week】

We are preparing for the festival coming up in May!



【Kohoku Paper】

We are publishing articles about our project, the Pre-Games camps, British cultures, and sports!



For more information, please visit <https://ipeds.jp/keio.ac.jp/keio2020/> Institute of Physical Education at Keio University (KEIO 2020 project)

① Make Hiyoshi the best environment for the athletes! (Daily life)

【Visiting the United Kingdom】



We attended presentations on the current usage of facilities built for the London Olympics such as the London stadium, and got a better understanding of the Olympic legacy left after the Games.

At the BOA and BPA headquarters, we presented our activities to the staff.



【Hospitality】



As a part of the "1 year to go" project, we decorated the BOA and BPA staff room and the library at the university.

【Hiyoshi Map】



We created a map of the Hiyoshi area in both Japanese and English, hoping it would help the athletes to have a pleasant stay during the camps.

For more information, please visit <https://ipeds.jp/keio.ac.jp/keio2020/> Institute of Physical Education at Keio University (KEIO 2020 project)

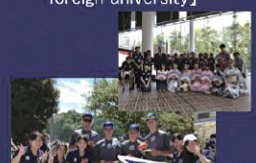
③ Learn about British culture & Share Japanese Culture!

【Fish 'n' Chips】



We sold Fish 'n' Chips in the cafeteria to let the students know about British food!

【Welcoming students from foreign university】



We supported the exchange of Keio's varsity Baseball Team and a foreign university's baseball team!

【Planning and Holding the Welcome Party for the International Tennis Match】



During a calligraphy lesson, the players wrote their names in Chinese characters!

【Conducting a Tokyo Tour for the foreign students at Keio】



We improved our English and communication skills to interact with people who have different national backgrounds!



We welcomed the players with Japanese hospitality!



For more information, please visit <https://ipeds.jp/keio.ac.jp/keio2020/> Institute of Physical Education at Keio University (KEIO 2020 project)

④ Create a legacy that continues after the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic games are finished!

WHAT IS LEGACY?

Legacy is something you gain after doing activities or something you want to leave for the next generation. Development of transportation is a good example of Olympic legacy. We, the KEIO 2020 project, aim to build the best kind of legacy below.

1. **Transfer legacy**
 Shining examples of transfer legacy are the maps we made so that the British athletes can spend their time comfortably during the pre-Games camps. One is of the Hiyoshi area and the other shows the easy access areas for the paralympic athletes.

2. **Intangible legacy**
 Intangible legacy is invisible. For instance, the conversations with Tokushima city (Shimada District, Hiyoshi shipping street), Kawasaki city, the British athletes, and inside the university are invisible. The experiences we gained after hosting the British athletes, and our own mission to support others are also fine examples.

The 3 focuses on legacy

Globalizing
 We will make full use of our experience working with foreign organizations such as BOA+BPA and supporting Team GB to help out the pre-Games training camps of the Paris 2024 Games. We will share our experience and our volunteering knowledge of the pre-Games training camps with the next host universities/areas.

Local Friends
 We will organize events to maintain close relationships with the local residents around Keio University. Our experience of cooperating with the local administrations and companies, interacting with local elementary school students, and holding British culture events will play a big role.

Sports
 We will host various events related to sports by using our experience of the pre-Games training camps. With the help of Keio University, we are planning activities that will promote para sports, and help other pre-Games training camps' hosts to support of all sorts of sporting events and tournaments.

For more information, please visit: <https://keio.ac.jp/en/keio2020/institute-of-physical-education-at-keio-university/keio-2020-project/>

3. 横浜スポーツビジネスカンファレンスにおける発表（開催延期）

横浜市スポーツ協会主催のスポーツビジネスカンファレンスin 横浜2021が開催されるにあたり、〈スポーツとSDGs コロナ禍でスポーツに求められるものと東京2020大会に向けた取組の紹介〉と題してKEIO 2020 projectの活動紹介の機会を得た。活動を周知すべく発表準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染拡大による再度の緊急事態宣言発令に伴い、開催延期が決定された。

Follow us for more information !

Twitter Instagram Facebook

QR codes for social media and KEIO2020PROJECT

← KEIO 2020 project HP

Who to create the panels

Leader Tetsu Ito	2nd grade Kiyoko Yamamoto Mitsuki Ito Yoshiko Yamamoto Yu. Egayama Yuka Sato	3rd grade Chika Sato Ryota Ito Shin Takashi Masahiko Takahashi Masahiko Nobu Honda Ryota Ito Sana Kijima Yu Inoue
---------------------	---	--

Special Thanks

Institute of Physical Education
 Director Yasuhiko Sato
 Professor Takashi Muramatsu
 Instructor Naoya Nagata
 Instructor Norihisa Fukushi
 Instructor / Project Coordinator Takayuki Inami
 Assistant Professor Ayako Higashimura

For more information please visit: <https://keio.ac.jp/en/keio2020/institute-of-physical-education-at-keio-university/keio-2020-project/>

図3 活動紹介動画掲載スライドの抜粋

4. ボランティア研修会の実施（12月11日）
【図4, 5】

BOA・BPAの事前キャンプの受け入れ準備として、スポーツボランティアとして活動を行う上で必要な心構えを学ぶべく、ボランティア研修会を開催した。講師には、日本ボランティアネットワーク公認講師で塾員の竹澤正剛氏を招き、竹澤氏の豊富なスポーツボランティア経験に関する講演を中心として、活発なグループディスカッションを通してメンバー内で意見交換が行われた。

本研修会はオンラインで開催されたが、研修会後、参加学生からは「貴重な体験談を聞け、知識が身についた」、「スポーツボランティアにおける重要な心構えを学ぶことができた」という声のほかに「ディスカッションを通して、人それぞれ様々な意見があることを学べた」などの感想が寄せられた。また、ディスカッションを通じた学び、イベントを通じて今後も仲間とのつながりを実感し、ボランティア活動へのモチベーションにつなげたい、という思いがより強くなった企画となった。

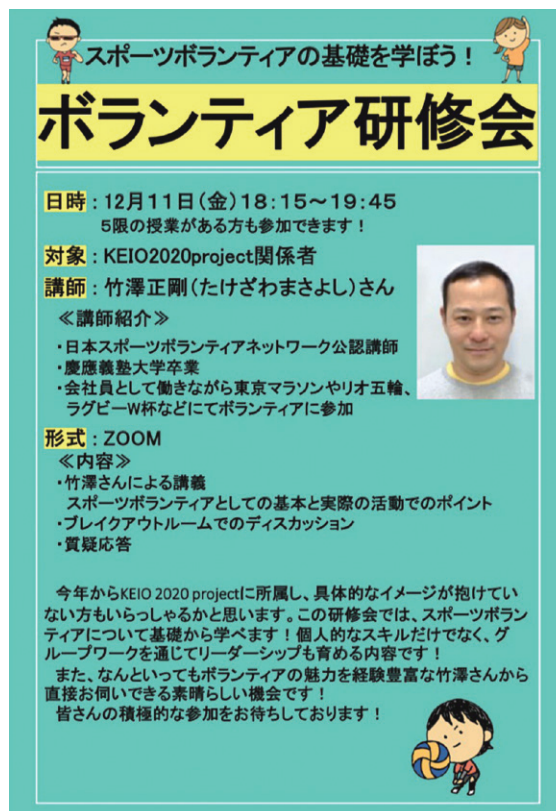


図4 研修会告知ポスター

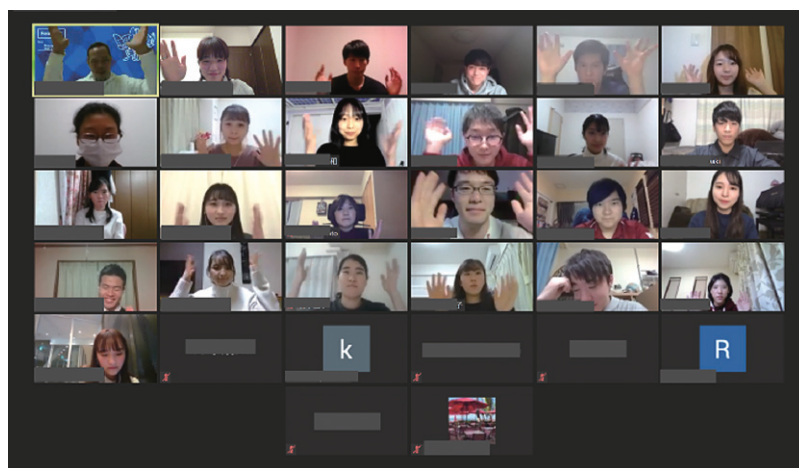


図5 研修会の様子

5. アスリート交流会（2月28日）【図6，7】

事前キャンプ受入時に、より選手に寄り添ったボランティア活動を志すべく、現役アスリートへのインタビュー形式のオンライントークイベントを開催した。講師には、トランポリン競技現役アスリートで塾員の棟朝銀河選手を招き、20年にわたるトランポリン競技経験、そしてリオデジャネイロオリンピック出場経験を基に、競技アスリートにとってのオリンピック舞台の特別性やコロナ禍における心境、そして、ボランティアに期待することなど、KEIO 2020 project メンバーから寄せられた多岐にわたる質問に回答いただいた。本交流会を通して、コンディションを整えて大会に挑むアスリートの立場に立ったサポート実現のためのポイントを共有でき、事前キャンプでの活動に期待が高まる企画となった。

**棟朝銀河選手
× KEIO 2020 project
トークイベント**

2月28日 (日)
11:00~12:30

対象: KEIO 2020 project
メンバー
方法: Zoom
申込締切: 2月24日

**百問尋ねて、アスリートの心を知る
～慶應出身のトップ選手と話して
事前キャンプに向けて“弾み”を～**

《ゲスト紹介》
 ・慶應義塾大学出身
 ・日本人として初の難度点18点台をマーク、トランポリン界期待の選手
 ・2016年 リオデジャネイロ五輪 個人 第4位入賞
 ・2019年 第34回世界選手権 シンクロナイズド 金メダル

#リオ五輪
 #コロナ禍
 #ボランティアに期待すること
 #今後の夢・目標

図6 交流会告知ポスター



図7 交流会の様子

6. KEIO 2020 project Year book (2019) の発行（3月）【図8】

2018年度に続き2019年度の活動をYearbookとしてまとめ発行した。発行までに時間を要したが、デザインから内容の構成まで全て学

生のみで完成させた。株式会社アド・プリント様には、例年に引き続き、完成に至るまでにソフトウェアの操作やデータの編集・保存方法等を直接指導いただいた。重ねて御礼申し上げます。



図8 KEIO 2020 project Year book (2019) 表紙

■課題と展望

2020年度の活動は、未来先導基金から3年計画の3年目にあたるプログラムの採択通知を受けており（採択名：東京2020オリンピック・パラリンピック英国サポート【KEIO 2020 project】を通じたKEIOスポーツレガシーの共創、代表：石手靖君）、これを基にボランティアサポート本番の活動と、事前キャンプ終了後のレガシー獲得のための活動をサポートしていく予定であった。本基金採択を受け、計画していた活動は2021年度に持ち越されることとなったが、活動のコンセプトはこれまでと同様、「実際にボランティアを行うまで

に、経験・実践・準備しておくべき活動・取り組みを学生主体で考え、学び、その過程で培った力をもってBOA・BPAを最大限にサポートすること」にある。

2020年度は、長期化するオンラインベースの活動の継続には、学生同士のコミュニケーションや活動へのモチベーション維持においてこれまで以上の工夫と努力が求められた一年であった。具体的には、オンラインミーティングにおける意見交換の機会を増やすことから、教員とのオンライン交流会の開催、他大学のボランティア団体との交流会参加に取り組んだ。塾の感染予防対策に則り、対面での

交流会も開催した（図9）。3月には団体発足当時から KEIO 2020 project を支え続けてきたメインメンバーが卒業を迎える（図10）。彼らは事前キャンプにおけるボランティア活動を見据えて試行錯誤を繰り返し、準備を重ねてきた。集大成となる活動は実施することが出来なかったが、その過程で得られた経験こそが今後社会を生きていく上で強い原動力となる。そしてその意志は共に活動を支えてきた後輩達に確実に受け継がれており、4月に新しく迎えるメンバーによってまた新たな色が加えられていく。依然として新型コロナウイルス感染症の収束に向けた見通しは不透明であるが、with コロナからポストコロナへと社会が推移するなかでも、その大きな変化を乗り越える“生きる力”を発揮すべき時であることに変わりはない。



図9 2020年度新メンバーとの交流会



図10 活動を支えた4年生メインメンバー

引き続き、日吉キャンパスが受け入れる競技種目に関わるボランティア活動を加速させるとともに、これまで掲げてきた3つの活動コンセプト：①選手をベストコンディションで選手村へ送り出す、②横浜市、川崎市とともに地域を盛り上げる、③英国文化を受け入れ、日本（文化）の魅力を伝える、に加えて、④これまでの活動を通じて構築した KEIO スポーツレガシーの発信・共有するべく活動を推進していく。そのために体育研究所では、2021年に延期となった東京2020大会終了後も見据えた長期的な価値を創造することを目的とし、塾長室や日吉運営サービス、学生部、国際連携推進室、体育会など、一貫教育校をはじめとした関連部署との塾内連携をより強固にし、“ALL 慶應”体制で【KEIO スポーツレガシー】を共創していく。

最後に、今年度の活動も多くの慶應義塾の教職員と関係企業、地方自治体、団体の方々に多大なるご尽力をいただいた。この場を借りて、御礼申し上げますとともに、今後の活動にも引き続き、ご理解ご協力いただければ幸いです。

【文責：東原綾子】

2020年度活動報告書

2021年5月1日発行

[非売品]

編集：活動報告書編集委員会

奥山 静代（委員長）

坂井 利彰 福士 徳文

東原 綾子 寺岡 英晋

発行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

制作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 港区三田2-15-45